竹多上

二十

哥ど詩と名づくるもの

源氏物語四十二の巻まぼろし

朱雀院の御門ありしゆきの後さらぬひとり
御ものがたりまくらあがしく
かりまさりたるやうにつくりなしたまへり
なりまさりたるにはそくあがし
のうれて年ごろもとうるひのかいつるさを
家のおりまつるほどいろげなくうきて
さきをまつ月ごろありけるとおぼし
そのうるまはをまあんせるひさしう
まづさはらんすらむとのおぼしてさうべきれ心
まうけどもをそのふれるうちの年ごろをてき
うてまつりて女房うちゐん四方おりまつりけるを
中に夜つかとうとうしく光源氏の源氏うぞ

（全三ノ巻ニ源氏文とう）

なりてまけるまぐ（朱雀ノ場）とうちうちさせしとき
まいりのて（行幸）なうさうねるもうぎまりのべうし
ひとれうとうられうしろもなりをぐ（ふ）とく
うもそのすぐさまくはちるさ更衣ぐうて
はしられいれまらひのはども心ばそげまて
大将の（勝月）間柏のうとまいりをうまりのてうさ
うるまるぶへまくまるうまうぐさ程ま
けをうれて（朱雀）うどもれ心の中まいとなしうさ
まれまいぶううさを結ぐうりねを結ま
ばうひまくうちなしうて世中をうううか
やうまて（源氏ま）うを結まうそられうの女三宮とおまるの

れ中まをぐれてうまれまるひうしげふ
ううし結そのはどれうう十三四ぐりまおうまつ（朱雀ノ心）
つうそむうすてやまごりうちん後の世まうち
ぐうてうれとなのむうげて柏しを結うんと
すんうぐこのれうしをうちのうくなばし
うげく西山ちうれて（仁和寺ノ）つうりうて（朱ノ）うれうを
結うんはどのれいそぐをうをせのまうそへてまる
この女のれまぐのくをなばしいそぐを結院乃
うちまやむぐうくなばれうれれでうどを
をばうまいうぐううれあうびまれまで
すうゆへまううぐうをばうこのれうと

つてにそまつをきて。そのうぢくをちんと
ちこちよいれそうぢむどもありけり。主家と
うれちやうそへて。[孝]紙そむうをうつべさ。
れうちづひうちんとうをきて。ひうち物
のへうとて。[兼香殿]女れもそひうをきて。さうり結
へうすれうれば。[長]くうもあうざうしうど。
家のうておうまれすくをのうぢうちくめで
うれば。[孝]ぢうのれ物紙うちやうちうしうを
をを結うう。[長]家うもうちげのうくうどうもち結うん
れ心ひうちうちうしをうを結れ[孝]うのほどよ
をしいうをうくちうびををすれうちうをもも

うちうちうをうちぐしうしうちうひうもれ
しうをへいぢくうをうちやすうをうをを結び[孝]
世ううをのうをうをも作うず。女家うちのうちう
のうちうぢまりをうをひやうちんうをうを
れうもゆぢうちめぢうけうをうぐひうれ
うへうをうをうしうもかいうちうはうるうを
あすうくへうおうをうをうすうをあうちん
いとロちうくうをうをいづれをもうちやうちん
れ世[主人]ますはうを面ぐうちつけてれ心[ぞ]めてうばし
うづうよ。その中うをうちうちぐうちうをうを
ちもうゆづうはうり。[十三]三家うんうけうをうをうひうて

源氏文を紫式部とかきたるひとすくなくてうちすて
てん後のうるさくひさしくなりぬるをいとどうし
ろめたくうちくはとれかをしのびてきこえ
こゝろ給へ女れまもろうつ（兼盛）
つげさせ給へれどもくれの人ちりはまきるを
ときめき給へしるされぬ（池）
るしひどもえうちそ
ものうてげつまはつぎこゝろといはくとも
まくこゝろとめてさひこゝろんとまでいはば
さすもやとそをしこゝろ（源氏文）
このれこゝろをこゝろ（おさゆ）
れゆくまゝ

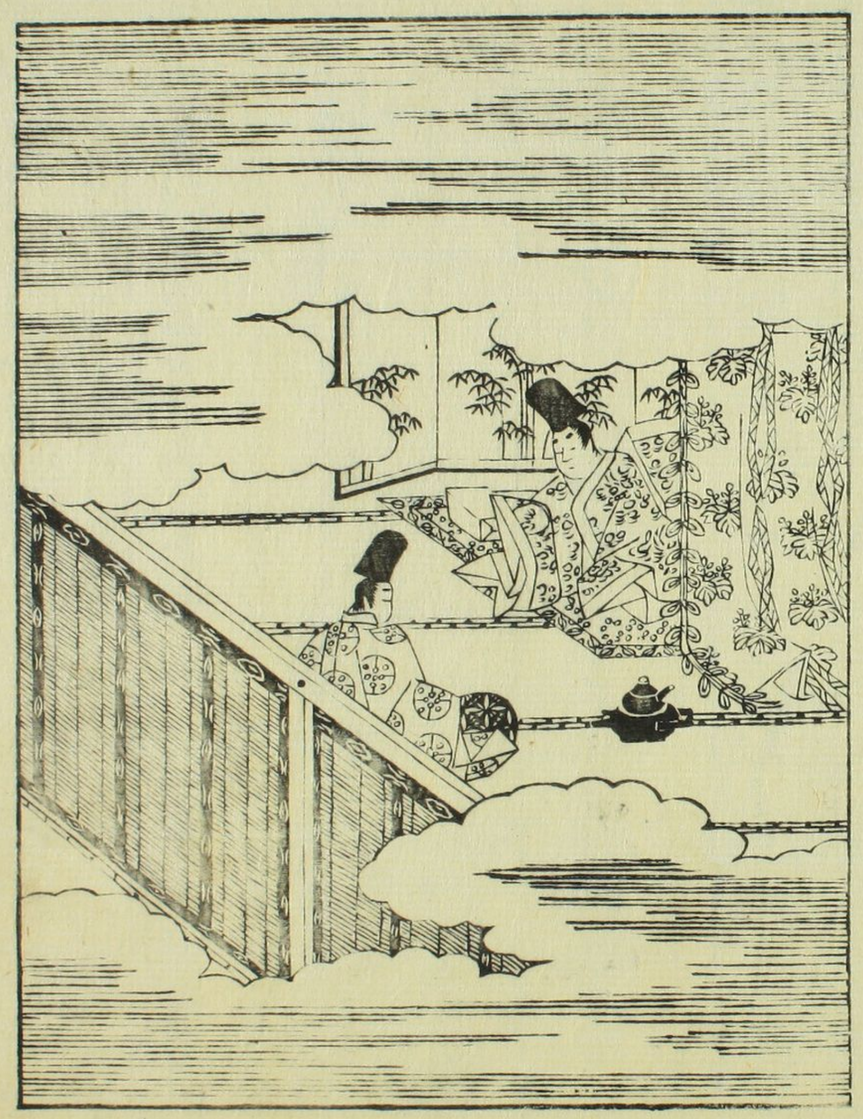
れるやこゝまくるとまくちりまきをまて
るもいでこゝ給へずれもあくけこそとこぐ
るやまを給へともありつれどいとくうちこゝへを
やこゝるこゝ面こゝいなりまくまつるとびこゝびい
るれこゝぐりるりこゝこゝりれこゝねとこゝ
せこゝまこゝれどこゝをこゝのせこゝれこゝこゝめこゝて
まこゝりまこゝるこゝぐこゝいこゝまこゝもこゝくこゝぐこゝこゝれ
ありこゝ面をこゝやこゝと所こゝまこゝりこゝまこゝりまこゝ給こゝ
ぐこゝりこゝこゝこゝてこゝこゝこゝこゝこゝこゝ六条院（源）
こゝりこゝれこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
こゝまこゝべこゝこゝ男名て（紫）院こゝこゝこゝこゝこゝこゝ

ふるさとの花に中納言のなきまうのうたを
うちなるうつわれてれまれどうそやうちなり
院の（桐つぼ帝）うへのいまはのさまをみるにあまるれ遠云あ
ま中まこの院（法）のれこと（冷）いまれうちのれこと
なんざりワさてのぬひとをを（朱ノ注ナシ）ぬやけと
ありてこそざりありそれぶらくの心ようせも
ふるぶるふるふ（朧月夕）ふるさとのあやまりこ（法）ろろ
とれてまうこともありえんとちをとうしび
ふふれてそのふふのふふふふふふ
なんもふふふ面ふあふふふふふふ
うへふりぬれぶふふふふふふふふ

そのむろひふふゆめうふふちんいうふへふり
ぬうりけいいるふんありようそのれろろぶへ
はふろぶべうふんと世人もをもむけうびけうをつる
ふふのびをぶふふふて芸家るるも心とうを写
ふふまふふふふふふくふふふふふ中ふふり
むつびふふへるもふふふふふはおもひ
ふふふ年ぶのふふふのやうる
立まぶふふふふふふふふふふふふふふ
ふふは写ふふふふふふふふふふふふふふ
れれ（桐つぼ帝）遠云ふぶへつ
すふのれれふふけふふふふふふふふふふ

なまてがをもはうしはいのごとくいとれしくちん
てのわさのけ業の法いまくへのことをうそへて
ゆゆしくえうるくちまんはぶくのふこのめんよ男
べきことをばりまうるずこげうとうとひまの
しこまこべこそこしもはしとのへちどうち
ちはれつのはうは中納云のたずさはりよりん
こうをくもはまへつさどくはりこ
まうへはて花やけもつうまうはわいぐ
世中のことをこまへまりあるほどよいだかの
こをつけてもうちくのこうべきはりちどの
けいでまいまくへのうれいこをありてちん

ちどうすありこるくはりもはどちん
はやけのはうちろこをうまうりこて
こうひをこうんとひとへてこまるねし
のちいちるどくをもちこめやこて右院のは遠云の
こともえうこまつぐずはは伝よおこしまし世
こはこうひのはどもかのこうは絶もをこのぐず
こうこのへぐはこて心ぐしをこげては
らんどくこともちるこ今こくまつごこ紙
こうてこげこるおこはひ心のこうをもこ傳
ちくまつこけ風こまはしこをこすぐこ
ちくこあをこ身のこはひこをのけこ



月日をすごしてくちんぬりくちるげさ卜結
ものゝ養一結二十(タノ地)ゝもまぐ見べうるるほどちれど。
いとうくくのひすごして。うちもうるまに
ほひて。いとぐくさうちをれ(糸)めるとぐりて。
うちまもくを結つぐこれもてワづくを結姫交(ムミ)の。
ばうくろうるれをやちるど。ひとをれど。
ちるうる

朱行 望さなくてのつらうつ いまはすきのれは
うらうれ そこぞろ心えめさ海まこそしがいつく
物うらーを ゝやすさ拍うすぐるねるく
ちゝくゝそあれと の結まふれうゝをへうる
の結ふすうくまうと あやしくびめぐする
山ひめゝやとうく ゝあうひて さうべきひと
あゝばあづくて うろやすく世をもなまひきをれ
ぐやくちん ゝの結いすうと をれげうゝまり
ちゝのふさうあうくれば やうのすぐうやとは
ちひうれど あとうろえぐれまもはうきいと
ちうしさうん ぐゝくくもはゝあうは

うくべきうゝひぐくのゝちんとどうゝそうして
やうあ如毎ちどいのぞうゝそ字て いとき経ふも
ゝ結ちうういうれ あるめぐゝうぐあつまりて
字ゆうを おいちゝ人うい 老人行 いづゝうりとき れ 侍のも
うりまおもきれありゝ海まはえちずゝ人字
結いぐあり いとめきあゝやまゝうゝまれし結
しれと いひきうふ 来 とゝうめて 行 まくま
侍れいと海ゝちうゝ人ぞうゝ いまはまる
ゝちうまもわびまうりて ひうとはれとつぐき
まやとゝゆうまひあん いとぐうゝまうまる
ちうゝぐちてもうぐゝきうりれど

いけうくあぐやうるめもとうぐぬ四ちすを。又
うちとけてうたうれぐとをよつひこぐれあそんぐ。
そのうたようけていすう地ちくあいぐやういけさ
ちうくうくうちうきことのちくびちうきうそうよ
ありぐうれちうぐくるもうたうれよとちくれて。
めづくうちう人のうた程ちう。家のうちうとひ出て。
拾遺ノ帝
ていうたうのうぐりちくくうちうう地ううのひ。さば
うりちでうづき。月ようくて。ちうくうりうど。
心のちうくもとぐくすひぐて。ひがうちうは鈴云
こもちうくず四ちうちうとひとうあうりてや。寄れうて
大ねうけちうくうん。そうれうたれもいとうとうちうく

すうくうめういづきうくのてのちくのまうかか
ちうくうくまうくようくうのぐうん心もちうね
ちうどいうれもおうちくとうとうまづくおやまうりても
おうすけまうりうう初づくいとうくちうありちうぐ
りでうきう結。ひ三めうやのいうけうくびうて。いうく
ちうる心ちうきれ貞程ちうを。ことうて。まうう結ようも。丸四
うやくくりうれいまうきううありひちうんうくをど。
きくくうやうくへ実。れけべうくんひとのうきうやも
うくんうあづけうきうくどやちうど男。結。とちうう
れめれうどもめくれて。けれ三ちうぐの程のうくちうどの結
うすつづでよ。六条のちう原のちうくの或うつのうくて出

ひすあ（法）ゆふ〜〜うてくんやうる。このさんやをあげ
うてもぐ〜まん人へまれぐ人のあるいあるを
ぐ〜。冷泉中納言（為相）さまの〜ひ給けぐくの如き遊
とてもいとやんごとなきうぐりまれをうる。
ちうぐ〜ちうさうちうてうてうのまぐらひ
いとあるくあるんでの侍中納言（為相）の名たのひうり
ありつう稽古ぐうちうすめてこそ心うべうりれ。
つうれどいとうやうくる。ありひうきれもーげ
ある人へぞあるとの給ふ。中納言（為相）云つまくうり
いとまめびとうて。幸ひも侍（あり）つうる心をうけて
ほうふ面よりひうりけぐくも侍〜ぐうけうる。

そのぐうひうるひてい。いとぐ ゆうぐうる ゆううじ。
弁院（係）うて中〜ちうる心いうるうつけても人を
ゆ〜くあぐ〜うる心いうぐあれをを治されて。
その中よりやむぐくあるされ移ぐひあぐくて。前（兄）
さいの大（樟）殿ちぐをもいまうつをれぐくうてうて治
ちれとうとて。ゆてそのかりをあぐけうていいとく（朱汁）
うちうちうされたの治りすれぐ。ばよあまうる乃（北）（保孝ざま）
ちうまうづ〜ひて。ぐ殿（女三）〜うべきあるひを
ありうちをやぐてあやぐ殿よさぐうるうて。
さもやゆづりをうぐ。まうちるぐもそ〜ちす
べ〜。まうくうます（朱汁）もうづうてあうんとさうん

女子もうつくしかるべくおもはれ人のあらはさるべ
みれどくきまはしられいつくるねこのまれ
あひだいさぐり心ゆくありさまをうそうすぐ
ゐ間はしれ（朱）れ女なるべかりけるあり
ともなるずむつびよりまいつるまつ時なぐ
さるんなばくしまして女のあざむられんいつく
とりぞやとの給りきれ（地）心のうちまむ（勝）の
恋のれともそしてこのれうしろこ
どもれなるまをもくしきれめれまれきうと
たゆ中弁あるれ（保）恋のちきさ人まてうしば
つうまうるきりこの（女三）やまも心をくまて

さうへばまりうるまあひて（たゆ中弁ノ）抽提すりいでま
うへ（朱）ちんちくれ（朱）乱文まてうそ給しをれ
恋（保）まりあるれまし笑をのへうそうちて
ひうりかりまうそ八例のうちれど海
ゐ海まつけてうちをそまり行ぎりつの
でもれうちうし給人あるれまげるを
うへ（朱）を（とき）亜（とき）うまりてまるまごろもひ笑のべき
ひともちけれべをのれいうまりうそもちまま
ごうりの文づへまうあんづ心ひとうしも
あうでをのづうひのみ（ぬ）のくもおりまし
うぐうさ笑もあうんうそはいうる海り

えだぶりうちん（絵ノ）ぶんずるよりをくも
このれうとうぶまりうう（ば）ぶうまりうくゐん
あうべさぶうさすぢとうきあれど（ど）をんかいつと
すくさうぶめぶうくなうまうすを拙ちれぶうろげま
ちぶげーくぶくあまうのれ中よ（女三と）ぶりつきうをて
さきを結ふつけても人のそれをあべうをいつぶで
ちりもすへをうぶとうをふふよ（たゆ中寺汁）弁いりなうべき
れうをうあん院（保）いあやしきまぶれ心ちぶく
うまてもうをめへくるへいれうろうまりうう
をも文をもあうをうぶりけうをもうをぶりう
つけて物ちりあひて（ひ）あまるけぶんへ笑ゆへれど

や心ぶとうくはぶしうをいうぶりありて（ぶ）ひとうを（ひとうを）
ちゆれぶれそれまうとうをうて（ひ）ちげちゆうすまゐ
ちを結ふぶうをそへはゆうをれず（女三ノ）くをありて
まうをやうまなりうまうすやうもあうぶいうぶき
へと（宮）男ともうちゆうをびてをうをうちゆあうをくい
えあうぶとうをへをうをうれどれいうぶとぶうう
ゆうをうことありてちんはゆうをいはれうへを
ゑの世まうすぶて（ぶ）まま心まとうをうをいちを紙
めのすぶうをてちん人のまぶうををもゆひ（ひ）ぶ心うを
ゆうめうをもゆうをとちん（つ）るようちくのすうひ
ぶうをもはゆ（保）ばしの結ふすうまげまをのれうぶミ

そもそもよのうちのなりまするさぐりつけてれげよくしるべる人へれをの人へるるば
ちぐれるさいはいまれし給るどうぐりあるく人へどもまて院のれありて海よおるべきえて
げうやいなうすあるそれよおるげるはげよ
ぎもおりまきばいうまうさびひられあるひか
うんとうるるふをのれとまるるとのりいでよ
ちるくるんちるまげの紙よはのめうり給り
しばるれ院はいるるずうけひきりさを給て
んうばのれはいるるひてばしめべるるく
るるをるるるのれゆうしまるるありめべくい

つるへるるえんとるんりを給いるるべきるる
はいるんほどくはつけてひられるくれ
ばしつきまへつをぐるれ心ざ海はまれし給
れどうくへぐるるへるづひるへんるるび
るるるいへのあるるくまれ給めるを光ざ海しき
くまやはんれうしろるのぞう給へぐいあまる
地志給りうくばしめるぐるてるるくはる
めるぐるるるへるまれれと思ゆれどいまれ世れやうるるい
これはぐるるあるべうしく世中をれ心るすぐう
めりべるもかりまるべるるをびめるわいある
まくばつるく心許るくのるるるるを給る

まことへぐいうまうまうぐりうそうぐつ先だ
るのれ心をうそうまうぐひうそうそうこうさ
ものべもうびうさうふうそうこうかうとうい
ゆうめうりうそうれうもうこれしうまれ
ざうんいれうろぼうそうさわうぐうもうん ゆうべうと
うさうも 春 うもうひゑどうろうもうん うそうちの
うづうさうう有れいうこうそうあうくしうあううも
あうまうたうされうといへうどゑいおうとうまうも
うようけうそうやしげううもめうぐゆうさ
うひもをれづうこうちまうぐゑれうれうと うれい
心ううくうひうぐうをまうさうべうさ人うう立

とうれうそうれむげうどもうも制めうのう心をうそうく
世中うすうぐうんうともう昔いう人の心ゑいうこうう
ううゆううまうじうさ程のうことをうがうやうひをうぐゑ
地うるうひうりけんいうれせういうすうさうぐうしうく
うぐうりうぐうこうとうも。ふいうゑれうそうもめうり
う。唯日まうぐうこうさうゑの富うゑあうれうし
うれうしうひうれむうする れうれうれうう成うくうしうくを
うぐれうこうれのうすうう地うどうゑれうれうのうぐむうれうて。
ううさうゑのの地うそうぐうふうを。うげうをうづうしむうふうさ
うげうひ地うくうゑゆういうひうまうそうゆうげうれうれうゑうるうと
うり。行うこううつうけうて。うくうをうぐいうふうるうこういうさ
うを

ぐるさ　ひざ　なれば　ようじょう　ろめ　くなん　そ
べて　あり　ようく　も　さるべき　人の　ろろ　ゆり
しと　さ　ろ　まて　て　世中を　すぐす　すて　すく　を
て　後の　ゆ　ろ　へ　ある　ら　も　ぐ　ぐ　の　あ　や
ま　ち　ゆ　る　ば　あり　へて　そ　ゆ　る　ら　い　い　え　ま
や　す　さ　と　る　ち　る　ち　り　い　く　て　て　も　あ　く　く
ぐ　ろ　く　こ　れ　ど　ち　を　ち　ち　ち　ま　ち　ま　ち　ま　け　さ　つ　け
ろ　程　い　ち　や　ま　ち　れ　ど　て　ま　る　べ　き　人　も　ゆ　る　れ　ま
ろ　ろ　づ　く　の　ま　び　ひ　ざ　ち　ひ　で　ろ　ち　ん　ま　の　ま　よ　い
ま　す　く　ち　れ　そ　ず　と　ば　ば　ゆ　る　ひ　ぎ　ち　る　を　く　ま　ま
さ　人　の　ま　る　ひ　そ　ぐ　る　て　あ　ろ　け　く　心　づ　ま　る　ま

ま　る　り　ま　づ　く　の　心　ち　り　ち　れ　て　あ　る　べ　き　よ　も
あ　れ　と　ま　ま　よ　心　ち　り　ば　る　る　人　ま　ま　え　す　く　を　の
程　ま　ぐ　め　れ　ん　ち　ん　い　ま　ち　ろ　ぐ　し　く　分　の　ま　て
ま　り　ま　ば　ま　ま　ち　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
れ　ま　る　ま　ま　ろ　ま　ば　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　る　を　れ　れ　の　心　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　う　ま　る　ま　く　の　ま　ま　ま　り　い　ど　ん　と　い　と　う　ま
く　ま　り　ま　ど　ま　す　て　ま　て　ま　り　結　ん　の　ち　の　ち　ば
う　ま　ろ　め　げ　ま　ち　ひ　実　く　ま　を　ま　れ　で　い　ま　く
ま　づ　う　く　ま　ひ　あ　り　い　ま　す　て　ま　れ　を　も　ま
ま　り　結　ば　ど　ま　で　ま　ず　ま　ん　と　ま　そ　い　ら　く　ま　ろ　ね　ん

ドつるを。うらはいもとげざるりめべき心ちの
するゑ。をひまゝはれてゐん。れ六条のおとゝ（源）ハ
げゝうともをのゝうゝうそ。うゝろやすきゝゝハ
ゝゝるりゐんを。うゝるゝゝりあるゝれゝるる
べき人ゝを。ゝるべゝるもあゝゝ。とてもゝく
ても人の心ゝるり。のゝるゐちわゝ。ゐるゝの
ゝれゝゝゝゝゝ。うゝろやすきゝゐゝびゐく地
ゝるゝ人ゝり。ゝゝゝゝるべゝひとゝれ
ゝりゝはゐゝん。（當）ゝゝ人ゝゝいやすゝゝ。
おゐゝゝゝゝ。ゝゝ人ゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝ
ゝれゝゝゐゝりゝゝゝゝびゝゝめゝゝゝゝ。

ゝゝきゝるゝゝれて。ゝゝゝゝびゝゐゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝん。ゝゝゝゝれゝゝゝゝく
ゐんゐゐゐゝ。（源氏ノ別当ヘ光ニノ家司ヒトノゾムヒトヽリ）ゐゝの名ゝの家ゝゝゝのゝゝゝゐる
ゝゝゝゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
れゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゐゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゐん。ゝ（柏ゝりんのゝゝ）ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

きれ。その人（柏）ぞうりをぬぎ。うねをとり。今まで
拾めて。そなたにまゐらせたる。かいなどをとりぬ
べき。ぬぎ。ぬぎ。ぬぎ

ゐんこくてとそりすでて結ぶいくばかれこころの
うどゥざんゆ限ゐくゆばしいかれう寂大納云ハ
年比院のべうこうてたくてくつうまつりて
まゐひかれこるをけれ山ごもりこ結ゐんのち
ゐうゐゐるく心ばそうるべこをひ家のれう云ゐる
くこゐをて。ゐうこをゐをゐべくれてこきちる
結うりゐゐるべし。稚中納言もうゐくゐ
ゐくゐる人でてゐあゐばゐうをゐけこを
ゐうし院そこをこそまうりてゐばをの
つくゐゐうりゐつけてゐゐしこをめこゐす
くゐあくばゐをてこゐれてゐあくうとば

ときめきもきりべれど女ごこのいまいとうち
ゐけてれこめゐるをこうばつこきゐまとづけ
りべうし行ごゐはくゐ殿のこうゐるゐてすづて
てをあやゐくゐいまこうちうりゐいゐる
れをやおまこをゐんゐれゐるばやひごく
ゐこゐくゐうづひゐばおるごゐもゐふゐる
ゐうで。ひごうゐ右こやすくばハウば男ゐうくく
くそいあくめゐまくうりすこうくくしくめ心ゐれば
ゐひこばめつくうちいぞれど。こすごゐはくゐ殿ゐ
こうゐまりこて結ゐんゐうくゐやゐばて。こくこ
ゐうこうり。長家ゐうこうくゐこうこうめて。

うしあらうらうづいまれとうもものちの世を
毎めしともあるべきことなりをどくえしめし
めづらすべきことなり人づらうしとてもうて
人いうざりあるをうとうしうばしうとくあるべ
の侯六条院ようてあやざ面よゆづり冥しさを給い
めとちんりぎとれれをうそそういあれどれ
そうさありけうをまちうをを給てもげこさうこと
ありいとうくばしーの給うをうといよくれ
心ざをあてまづうれ弁してぞれぐあるい
つえ冥さを給けうこの多のゆとうくばし
りづーふ海いそ紀ぐもれ冥をさうまえれど

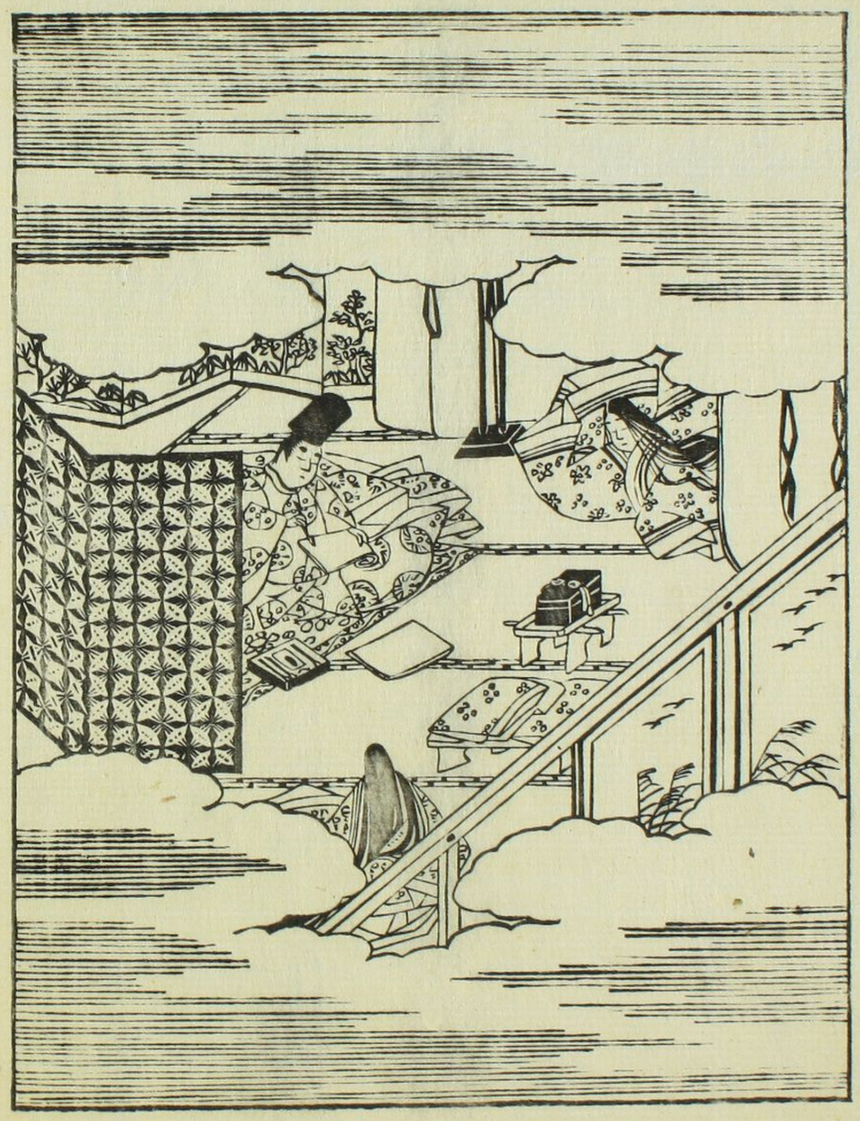
うろうづうーされうとくうもあるうれさはあり
とと院の世のありすくるとてうるまる
いくぐくちをられうそまつべうてうそのれ
うちうをのくをびうけうり冥んげこうぶいを
あやまうあうて いまうぶーのはどものうとまう
うざうあーびはうるつけていづれのゆるさ
ちをもうそようそうもちうてまりうべうも
あれぐまうくうりりうてうをさをり自
んをいとるうそいうちうをうしめとあるふを
それぐるいと不定ふじょうある世のうぶめなるやと
のあてまうてひとへるれれそまつべうさ

すらむとぶらひもてゆくに、中ごろのうち
づかさのとさうんさぶらひ、心ぶかくものの
ゐるもおさなくめはづらしくあるべき、中納言
ちゐどいとうつくしうなりたまへるを、ものの
さとをとりて、人づかもつかはるるやけのけうとろ
ともなめげさおひさきあるべきものとうんる。
ちゐどうとるるうんされどいとうつくしまめぶりて、
さる人さぶらうてぞあめれば、それまぐらを
ゆふやあんちどのゆひて、ものつくいはばし
もちゐれうさはるを、弁いはばろけのけさぶめ
まもあるべきとうくのるへまへいとものしくもうち
おりたまひて、うちくるまもちゐるうち南
ちゐぐくしくゆれば、すぐるおもてつ、いと
うるくもなりぬるまくるあれば、あかぐちゐく
さるるものされのるぶらもみるさるありうしか。
さぶうらるこそなりぬるいめやんごとなきまづの
人ぐおりすとしふことというるさくるりそれる
さうるべきさまもあるべ、ものるべ、さうしてすゐ
の人をろうるやうもるる。桐帝 友院のけはる大后 ゆえれ
ぶうのさぶめれかれうていさまもるなるしうど。
むげのすゐるまりぬるりし、へる、旅づか 安るおびしも
をされなるるさうこのこ三 源氏 のけ母女れうてそそれ

右づ
家のれうりうりう地しゐけめうちよりつぎ
ゆはいとうりというれゐし一人ありうりば いげ
方よつけてもこのひめうりやとりべてのさいうは
ようもおうりうりさちどいづくいうひ異めべし
此年も言の年雅院うはれ心ちれをこうう海うを
おりまうりまいりうびあいうりうりば立て
十三ノ
れもざのうりばしいうりうびうりうゆく
ううりうりうげちうりまでいうりうりくのうりれうれ
らひいう人数のうりばりてまれ事うりりめて
拓殖朱雀院ノ事
うりのあやうりうをいまぎ老ゐうばまうりう乃
ううれのうりうをばしやうりてうりうりくうう

うりくうやくうりうりうりうのへうをうりまりれ
うゆひよいはゆうりばりうりばうりうりうを
ゆうりれうりうりくしくおうりうりひうりて
まりうりうりばしうれうれど院のれうりうりを
ようりそひうりうりゐるうりまりりゐ今二所の大臣
ち海りの上達ちるいりりうりうりうりうりあるを
りうりるめりうりひうりすけりうりまりりゐかうりうち八人
歌うべうりうりうりるもいうりうりず冷うち長家も海りうりず系
ひうりひて いうりうりれいうりうりれひうりうりうり院出
れうりいうりうりうりうりうりうりうりうりうりうりうりうりうり
まりうりて心うりうりうりうりうりうりうりうりうりて人数おうりう

殿のうへ地ども地くまをせ入り六条院(源氏)よりも
れくるいとしるくそうもれどもいとうるはしく
禄(ろくとかや)ものの大殿のれう引出物ども(源氏)院うぞ(源氏)せ給
けり中宮(秋好)よりもれさうぞくくさ〳〵のうへ心ことな
てうぞをせまて(秋好女房)れ昔のれぐ〳〵あげの具ゆへあり
き御よあり〳〵あらそへてきすぐるまくのうろぐへを
うゝあるべし(源氏)それとうをてその日の夕けうるまう
さを給(中宮大夫人)宮の御のすけ院の参ぐるもさまふとれ(源氏)使
まて姫宮(女三)宮のれ方よりまいるすべくの給ををれど
うゝとそ中まありけり
(秋好)さうあぐ〳〵昔を今よつゝれがむのとぐ〳〵ぞ
神さびよけり院(朱)ゆんじつけておれよあばし
野さ〳〵ぐもありうあえ地けちういあぐと
ゆづりさ〳〵ゆへ(女三)るほどげよあもぐちさえん
ぐあれべれうも(秋好)むうの衣どがさう垂て
(朱)さつざるさうる地まもがうろげ世をけ宮の
をぐ〳〵のさ〳〵ぶうまで(世)ぐぐ祝(ろくび)さ〳〵うまへ



れ心ちいとうとましくおもはれんとしけれどいとかうして。
十三うるさくこのれいそぎもてめれば三日ばかりつゐにれば
おろ〳〵結ぶろうさき程の人のうへにてなほらべきは
とて涌くろういうもつげちろわざわれば。まして
いと哀げなる方ども多ばしまどふ内結のうむ志
志いつとさうしひきていとうとくばしいりうを。
志らへうもてなをうみろいうざうありうりく勝ノ
切ひきこめる別のふへがくをあるれうて。
れ心うぶれめべうれどおちぶちゐれけうそうう
うのて山の庭をうとうとめていむことのあ
ざうと人をうひてはうぶちまぐちる程ば世紙

別れ給ふ。いとくちをしくて、そのせをうひ
すきしうち侍従ちかどぐ、涙もえらびめべまして
あるべうち、女は、更衣こそこの男をんおうこしを
ゆすりうちて、なさどうむ、いとく心あるこしう。
うらでもづやうちう有よやどてこまべくえしうう
けうはいこびひておばしめうくも、毎ごこの
ぬさうあるよひうれてと、えしの給ふ、間うう
給まりてれうひのうげさいとうも六条院を。
すうれ心ちうくと、まをして、家のれさ
うどりのうふちどうそ、これあるどくおりおの乃
みどくくうきまりうれや、まうくもんだと

天皇の儀式よりはけだり給ふ。ふもてなすひ
ぬしうさ面ちどい心うくもれどいとさうはそぎ
なて、例のうくくしうめれ車よりてまうて。
上達ちどうべきうぶり車よりてつうまうり
なへる院よりいうどく給ひうこさせのてく
ものきれうを、ばしつうて、封面ありうう
つうさ面ちず、どばかりますうさよりまう
うういうへていれ車のふうまりのへる院貴給
給まり給ふうもうさ紀うれて、うちく
うどめどく、ばうれどうをえうめひ
給ず、右院よりをうれ車ひうふれて

河桐帝

ちくふのへてれしぐひ
しをこころもちくぐふのへて心をこころのこ
ゆつづみくこころてまつりすゆ仏までをられ
ましてまつりめる心のめるこ後をげうくはまふのへ
らるれ分ようていいごとるもあるまでを
ふこまへこち仏はりくあるをさるまいくふのび
ぐこさこと切はうぬべをひぐるこそ仏けれと
ちぐまぐこく切ぐしこう院も抱心ばそくはば
こるこまえころづよりこばうちちはこれ仏けく
いるこへいまれれまれぐこりいくこるげこりこて
さきかて邪ふあすこと切ぐく仏けくさすぐり仏

へめるをこちこあこてふこはいのもこまこてを
とげずちちあんこと心ぐふをこてちんぐくても
のこりのこもひちくいそこちひの心ざしもこちふ
まぐれど心まげこりまれどあをこそ念仏を
ぐまとぐ仏ちもぐくしこあ分こてを世こり
ちぐこちこいふでこのころざしまひをとぐめこれ
こちとぐふのへきこれめこもあるをいまで
つこあちさをここりをこそぐまやすこぐちんこて
切ぐしをこてここ後ちぐくこくの絵をする
ついでまかこここちをあまこうこすて仏ちんころ
ここをこ中まふ心ふゆづこ人ちこをがこるこ切こて

うちろめたくこゝろづかひをしてまねこうはあれ
ども　ことをこゝろにかけてまつり給れこゝろの
うちもさすがゆゝしきかれあるを面なれどだに
がしずからてげにこゝろをくるしうも
すぢいづくにかこの御のうちもこゝろきいらちおも
げなるつゐでなれん給はけうまなくておつまをび
いとうしきすゑのせのまうけのこゝろおもへ
きこゝのこゝろあるあつぎ宮にすをまゐてこの
れこゝろ宮にとをこゝろ面もんこゝろくいこゝろして
とろそうなるろめゝかめべきこゝは給ゝひべきこゝ
ゆくこゝのこゝおぼしゝあひべきもゝ給れど

げにこゝ恨あれべおぼゆるやけこゝろのひとれまうり
ごとれこゝろにこゝろべゝこゝはいひちぎゝ女のれ
あるおるまぢりのけぎやうちれ心をおるべき
なもゝゝぢりり。すべて女のゝあるは面ぐ
まこゝのれうきろこゝすべきれいをこゝべき
すぢこゝ契りをこゝしえこゝれこゝこゝもぐをこ
こゝめれまもりめゝ給ゝんうきろやすうべき
こゝこゝ給ゝをお紙こゝるてのちのれれうこゝひ
のこゝべくいこゝろしこゝこゝばゝこゝひて思て
こゝべきれおづりをこゝぶめをこゝをめべこゝこゝんん
給ゝと養しゝ給こゝやうこゝひうこゝ給れど。

それもうちとけてものいひあんをけうとくへのこゝろあ
ることゝ侍るよ世をさまりさうのことこうずる
人をえらびてさうさ面のことをしつへるこゝろ
ばうりうりまてうく今ゝとこの世をもちうく
こゝにまてゝこゝくきうくちうべきこともあるべきまた
ちうする中にも特ぐこゝきこゝあるてさ面ぐる
ひいづれ侍ぬどこゝやうひをもりゆくゝ文うり
くへすべきこゝもあるべ月日のこゝゆけ心あいて
きくちんうこゝうこゝゆづりられどこのいこゝけ
ちなき関敷王ひとり文もつきてもぐこゝきてさう
べきこゝすなもれ心ゝ侍ばしこゝめてあづけ文へ

と実ゝまれこゝ紙特ぐ納ゝちどのひとり祖しつう
紙ゝすこゝうべくこゝそありられ侍いまちぐ
こゝちんぐこゝれてなくなぐ侍ゝとこゝし給
中納ゝ名長まあゝちるこゝいくこゝけうう
まうめべく侍ゝを侍ぐもまこゝあこゝて女ぐう
すくゝこゝ侍ゝあうぐけるくゝとゝもあうこゝ心
まてゝこゝちこゝこゝてこゝきゝ侍んゝおこゝまれ
げゝこゝうていなげゝをこゝぐもこゝ紀こゝぐ
こゝてづうまうこゝまこゝや侍んゝとゝうこゝ侍
しこゝるのこゝちんこゝろぐこゝ侍ゝべこゝこゝけ
ひこゝよ結ゝ祝ゝへめれぐあゝこゝの侍ゝこゝまこゝ

（ほのかなる人の名）と聞つゝ、ちもゝ、これ（筆）家にそれあるべきのく
（精をこ）さらに掘りて、うゝ
ゆゝ、院（筆）のれまへるをんうのけだんまれちち
ゆゝ、昔ゝ、ゝりてまうを、人ゝ湘をのびゝ結、義（あれ）
ゆすぢのくゝもあれど、うさけれゝりゝ、種（ほん）
みてゝうゝ結、掘（ほん）どもつきゝ結、別当大納言（筆）（女三とあるべき人）を、
れをうまゝ結、あゝの院（筆）もゝんのゆゝう
いゝれれゝくゝつて、きゝぶりちやまゝく
ゆゝれゝ、この結（筆）のゆゝく筆、ゝ光れるを
ゝゝやすゝゆゝ、ゝゝ（ほん）六条院いちまゝ心ゝうゝ
ゝゝゝゆゝ、ゝゝきのゝ人をゝうゝれ

ゝゝめゝゝゝゝもはのゝ結れど（紫）ゝもあゝ
ど、前（種）斎院（さいゐん）をもねんごゝ筆結やゝりゝゝど、
ゝゝもゆゝゝゝげずゝゝゝをゝゝゝて
ゝゝゝもあゝゝゝひ筆結ゝゝゝゝゝゝ
ゝておゝゝゝゝ（ほん）ゝゝくゝゝをゝゝゝゝ
ゝ、我心い家ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ（紫）ゝゝゝめ
結いゝゝん祖ゝゝゝひゝゝ結ゝんゝゝゝゝゝ
ゆゝゝ今（世）のゝゝゝとゝゝゝゝゝゝ
筆ゝ結ゝゝゝ表ゝゝれ中ゝれゝゝゝゝゝ
備（び）ゝゝゝあゝんもゝゝゝゝを、ゝれ和（筆）ゝ

うちやすうてあり。結び文の日ゆきうちつり。その
ゆくさき。地表に。さてうるはしきれの紙に男え
うち結。院（未詠）のうへのぞうげちかう結りうるかれ
うちひきまて。表あるうへぞのきつうれ。女えの
文のれうくせ。ふと持（まち）げるなばしてうちくか
んの結をひらくうべうろうてえうてえて
いちびず蛾をうをくくくぞ人いひちうん
う。今いうやうのこともうねくしをそう海
ぞくせひちうまうれば人へでうてうこをうを結し
うたうくのれうえうしをうんのひいぞう。
心ありうう海ちうくぐうをのうまひひけし

うたえすくくうくもう人うひうてちん。ちうう
山ずうううひうひ結ん結ううそうもいうう
ちうあ。あうううやなばうえべうをいううでうくく
ありううれうあううちうといううううあう
まうでうう紙。ううかううううひうう。れれうあうう心
ゲうううあうれうちううとううばまてうてう。
紙（れ）もくのどうてうう結うでうなうう結だう
ううれすうひうくうでうう。めぐ海（ぐん）うう和ようう。
心やううあれ心ざ海ううれど。ううなばうもうとか
ばすう。うううれうて義（河）ううれゆうりうこうう
あうれ。ううう結うう心を垂なうべうう。めぐ

きくくてゝあるべく心やすく
てもあるべきを（保氏文）女のれるを海ありても
宮と女三ハ宮とこゝ
うとうとしくすべしこゝ
（保行）あまりうちとけぬ
うたがはしくこそあれ
して
なほ
こと
ぶん
ふ
ぶ
ぶ
ぶ

なほおいつくるなくなるのれうろうくどいつでうそ
うぞうのうまはなるんいまはうとものを
つづくをこひわがうまてをてけうせのひと
つくへなるんくとをうまるはやひけげはけるくど
つとおいつくるのをまそなるをうりぬ
年庭院ようい雅家六条院ようろひ語うんれいつそぎ
とのふ冥十三語へうくどいとうなくなるくなるし
なるげくうちるもれ心ぞくありて冥語けう行ま
うれるぶめをうろうりて雅しうまりま
うりうういうくぞうそうる喚語けれべれ賢乃
くなるけるもうろうすぐうぶ世中のいく

なるうてうれてうりひぐくをこのつひはぼく
いあくうくとい昔ようこのを語もれ心ふてくうれ
くくひ語正月廿三日子の日ようう居大和殿
のかかつれまいう語りてうくをもまくし語
もぐいというくを遊びてはしまけうれぐ
はうまてえいうくくくくを語もぐをのび
うれどをうりのれいうはひれぐけうりのふ
俗式なぐいとひぐうくをもを六条院ようくをのおとぐの西の
をうるうりぐまおまうくをふ廣びをうをうをぐ
のあうくくをひをうれうりうりうく
いるぐいうてずれぐしを冥まいれしとれ

けうそくちかくすべてそのれいぢかもいとさきうしまき
きせのへうらそんのこづゝしさうひうりは衣
だそうすへて衣冬のれさうぞくぐうごうすりの
きこれすでもゆすうつきうけのそちかやう乃
地うらくさうとつくしのへりれそぎしの墨
まはだんきうんをけうりめげしきあやめ
をけうしはるぢきれをも衣づひちうう心
ぢへりつまあしくうんの素地のこやびみく
うどめきのへるへうてめられめ海うちるし
ぬへり大方のくれをだごとうきうりうくし
うれ行ちりへぐまいりちぢしまておまして

いで給とそうんの素面よりれ心のうちうは
つうへはげしせうこもさ海ぐちりけんて
さつくうきうまそくれ実ちぢいふこさも
ひぐぢへまやとはげゆうさ海れちる海ちうく
人のはやげちくおうきうますをめづくぐう
月へぶうくうまりはうしつとうげうれぢれ
けぢやうちうへぶてもちくて出勢冥うつ結
後左兵衛佐大大弁へ
おさちるうき素もいとうけううそれし結うんの
素いうちつぢうてもれんぎれしづとの結うを
大和のうつけぞうまぶはけうんぎうきんうて
やうりはるぢやうふりはけぢこのちよごろちるき

なをしすぐさどもうてなるすぐうえひもう
うの心うは、うえよりおもひとどめうれぶ、あぐ昔
すぐうのわくたき貞任よりおうこともう
なをを、うすぐのまゆしうちん、うは
うしうさまで、ひたうしうもはけう、中納言
のうしうとまうけうをうとくしくれ
もひへぐて、まぐうをずうへうとうぞへ
うりのひけうそふのみばうそうれうされし
ぐ、老をわうれてもはぐをうをとうそ弦うんの
をもふうとくひまうまくしうけうへ
うひて、ううひあうさ殿しのうう

わう紫さすのべの小松をひきうれてまとの岩れ
をいのうふうれどをあてはるびぬ弦ぐん志
をうさうしてれわうれうを殿ぐうう赤れうれ
うをうけうあて
小松ぐうするふのうをうひうれてやのべの
わうれもうをうひべうを

ゆまど（涙）ふるしくてあまたゝびあるを
のひさしつゝさる給（ゆ）へ或（ある）文（ふみ）ハまいりてく
ばしゝれば（涙）ばれきゝてこあるをけるゝ〻くし
ゝきれるゝゝひまてゝゝるあるやうあるんを
びんゝるゝてはゝけてゝゝるゝゝゝるゝたゝのゝゝゝ
ゝゝまてゝゝゝれるゝゝひゝゝゝけゝゝりてゝ拙し
ゝゝもゝゝよゝやゝまゝゝゝ

のけぐんろうおほんつきどもちろしく。つまえ
きろうほどまきれうり。第羅院のれうすりのこと。
ちんぜ多つぐきて給ふぬようり。弟人をどハめうず。
れ箔ちどおほきおとぐのそのるいとしのへまて。
世中よこのれ賀ようり又めづらしくきようとつす
べきことあしどとのあひてきどれうれの限を。
ねてうりおぼしまうけうれバ再びやうう
れあそびありうぐよまちるよ。和琴しが忠
おとぐの第一ひ一給けれることあり。さるまた
ぢまの心をとぐめて引ちるし給へるれいとちるび
るきをとと人ハうきてよしのへバ大殿相乗乃

きくいちるづうをきめのへどげよいとかうしろく。
おきくとるまづくひく行ずをぶ赤いぢと
ひちぶづくしええいぢあいぢぞうしとうろ
ちて衣よ人ぐおぼまきしべよちるびてあと
あうまどもさぶまれうまうのうえぢも中く
ぢひきるべうきあしいちうをうろよまうもて
ぢうきあうきうちすぢうげのもれと
とのへられうかうえまおうしろく。あやしき
まぢひぐうちおとれをもいとゆうう
ちていうきうぢてきくびひぢさおくあうを
てぞうきるしあふうれをいとわうちうの

ぼうれのあつまりてあつまりてやうつきあるをつと
うちもとしいたりてさりしをとみこうちもおごろき
給琴（きん）の音（ね）をあまひきたまひ給ひしことい宣旨殿（せんじでん）をんれ地
まて代（だい）こゝ第一（だいいち）の名あるりしれ琴（きん）を相帝（そうてい）院の来（きた）つ
る一昔（ひとむかし）家（いへ）このこと給ふとて給ふのへりをたゞ
切りのこたりをけりて給ふんとするを先（まず）おとゝの
ぼり給ふるれつゝをなぼすとあるれる
昔のことも思ひいでらるゝ世（よ）のうちきえ
とゞめ給ふるれうきさうのてふんもおのへ懐（ふところ）
ふたゝび給ふまて表（おもて）ふたゝびうちてきき
地ひゝけどうひきたまふとくしうれど恨（うらみ）

ちくもとうきあのれ遊ちうとさうぶれへどこん
しまをてそぐれうたのうちつぐして
ふり都ふるあの文（ふみ）ましまをくべども
ちうくうちうて御（おん）あそび給ひけれど
の蛍（ほたる）のぐちうさ
ぶとのこゝ風ふちうて撥（ばち）ずいとをやうくふ
まうけれうちうう曉（あかつき）うんのこゝろ給ふれを
うちまれちどあうう世（よ）をすりるやうて
あうちうすれ月のゆくえもちずかあ
をうちぶへうぶへうをこゝ風へうけうこつけていうろ
ぼそくちん世（よ）ぐい老（おい）やまれとこゝのひうこ屋

[illegible]の方をたくさつまるき
ぶりて、ぬいめるきいとくちなくちなんなど笑
まて、袁よもかしこくもたひいぞ笑給こと、なるる
しもあるべい中くはのるまて、くいそぎつくり
給をいつくあるなくちかしこくなれけるうんを
志もまゝしの親をびさうべき奏計よさひ笑めて、
きぐくうまやうまやうしはい心じんとう月よえて、
くせよすゝそて給ようけてもどろかるなるひ
ゝゝし給ようくて二月の十余日より第五確院志
姫京六条院よりつり給ひ院うもはい心まうけよ
つるなるなるはれまうしはのうちいでうはい

[illegible]
[illegible]の一二の基つるなりまて、女房乃
[illegible]
[illegible]
[illegible]

三日がほどいふ所にもあるべの院ぐるまを
いうあるくめぐるくるやびをけうる給あいの
うへもこるまれてさぐるもばされぬせの有る海
ありげよるるつけてをうるなく人うおとり
けることもあるまぐれどまるぶ人なく
なるひのてまるやうるあひ紀をくおがげを
くさけるひまそうひのへるるお海るる
なくばまれどけをきなくのをまてなりてれ
けるのほどもまる心まるをいそのて
いとらうるげるれ有る海をいとぐあるぐるとと
きひるるる給姫文はげるまぐいとちいるくるる

ありるはるるするうちもいるいるけるきれるるる
して・ひるるるけるびのるうれ紀のゆる
るぐるるのるるるるる出家るれも
ざれているひありを・れるいるいるけるく
のをみしのへびるるありるくげるをるうちる家
るるるどはあるまぐるるとばるをまれるるぶと
あるりまのくをえるるされる海れるるをり給三日が
行は我れるくけるる海をぐるるるるひ給
まのるるる・世ぐれとれまれ表るりれぐどもるぐ
いるくるるるめるを給まれるる行るぐあて地し
まふるるさいるぐくるるるげるるるるて

ちりのこりあれば、まことの人とおもふべきぞ。
わづらはしく心ぐるしくなりぬべきわざをこ
そすれども、ものぐるしくもあらでこそ。とりけれど、中
納言をば、えばしりけずまちめありしをと、後
ちりぬべきはしりけるを、涙ぐまれて、
とぞ、ものいとをかしくゆゑ給へるかなとぞ
後のとぶらひあんなるべ。分なるべきもいとをかしきなるべ
れ。まことにて枝殘るこそめでたけれ。
ちりぬべきものなれば心のうちにもいとをかしけれ。
ぬべきにて、ぬべきの心ばへなるべ
きなるをもてあつかふもいとをかしき

とかうべきなるとぞいひあはせたりしのち。
ちりぬべうさへあるべしとて、つづえをつきてより
ものなれば、枝を引きて
ものちくうつれば、世中をのがれぬ
ものなれば、あるべきまぎれをとて
こそ、ものもきこえなくなれどげにとこそいひて
命にて、西を絶めぐりめぐらるるなれ
中の緣とぞ、ものもえいはぬ。
ものきつれとぞ、のこりなくへいぬるなり
なりぬるなれば、えあるまじきなり
しのものもいとまなくぞ。
とぞ、ものもいとまなくぞ。

あんとさひしくとぶも今てしのこまてもちれ
給つゝさしぶうまゝそうちとけゆくすゑよ
ありくてくせのらくこをなれのるゝわと
のいでらあるよさひしひぶしべこさせの有る海よりわ
らぐられべ今ら後もうもろめこうで芝てちう
ぬろさこてつれちくまぐこうしのへぐこふふ
人ぐもおもこぐちう海せちうわ（六十九）あまろ地しこまふ
やうちれどいづくもれこ（七十）ちるのれけらひよハ
くこりはぐろ海ちてるこまへバこそこと
ちくなぐこうるもあれをしこてうぐらちう
有る海よけれてもうる結づまこうとてもら

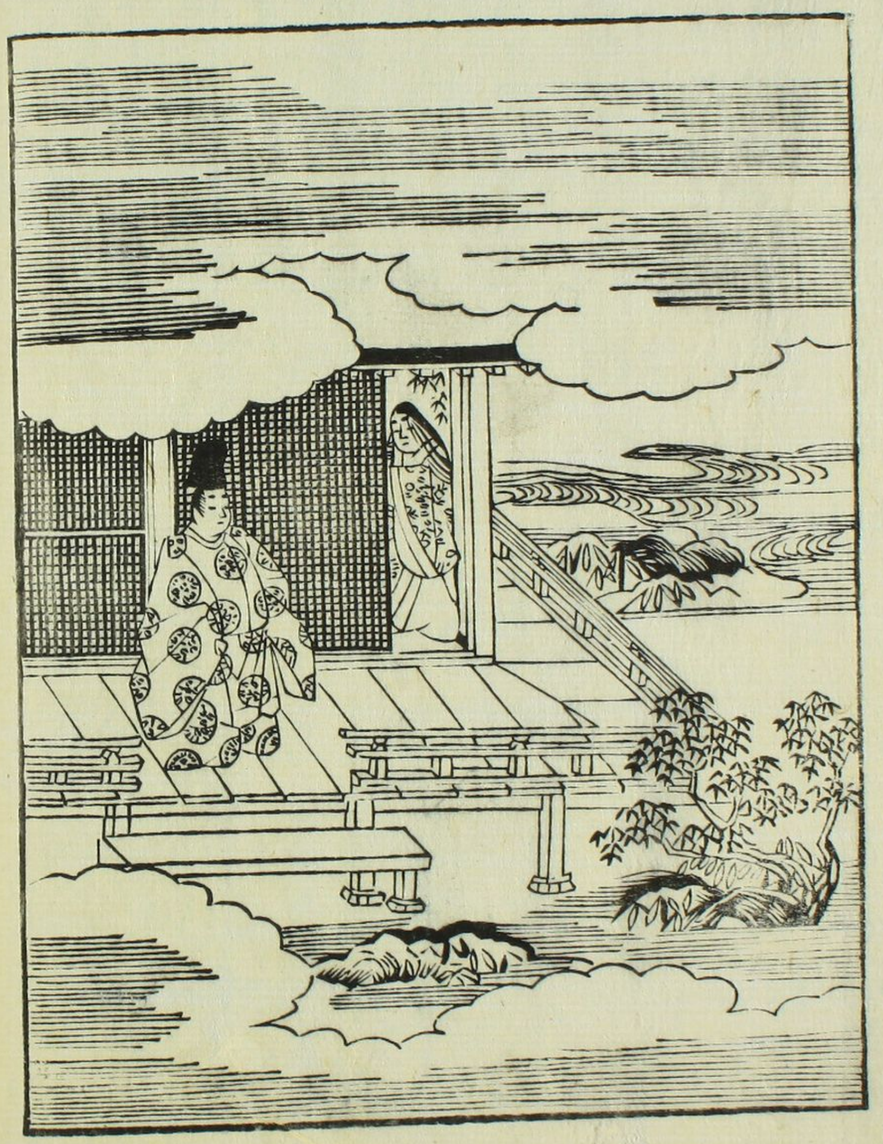
ちるここつけてもやすくめくとのあくん物ち
ちり必ずくりこくぐいぐこうるんうしなぐ
とのぐぐうちうくらひちげしげちうを（六十八）嬉を
こくこあやうこいとけこひちくけこひちくぐ結
つ秋ちうまでおうこ（六十九）へのくぐちるぐつひ
こひこちるここくこくばしてうくこれうれ
あまくもれしる結めれどけ（七十）ろこちるひて。いま
めしくぐれこちこはまもあくぐとめちれて。
ここうぐくちばしくうちうここの（七十三）わもうく
つちうの入ちこめやをこれちをつくこぐろのうちぬ
まやあんとれもむつ（七十三）びここてあくまはしこち海。

あいなくへだてあるこゝろよ。人ぐやうりなくんと
すんひきこゝろ程おろかなる。人まこゝろ
なるぞこゝろとも。をれづゝのぞうりざるれ。
こゝろげなる心ぐこゝろきれこゝろあめれど。いづで
心をれをゝどとなんこゝろよりどのこゝまへむ中務
中務の君などやうの人ぐめをこゝろせゝおまり
なるれこゝひやこゝろなるどいつべし。昔いこゝなる
こゝろ。つひなる。結ぶ中務中務の君などへどこゝなれどこゝ
ひいひれ方ようこゝひてこゝ紫心をこゝろなるあり。
こゝれいこゝなるこゝろもいつこゝなるあれば。すんまこゝろ
こゝひこゝなれこゝへぐいふ中ゝこゝろやすきこゝなる

こゝもひけつゝこゝひこゝこゝ結もあるをうこゝをゝ
こゝろへこゝこゝ中ゝこゝろこゝれ世中もいとつれ
なるこゝもれをなるどこゝこゝれこゝいこゝひなるやまんなる
なれば。あまり久こゝこゝこゝひおも。何なるぞひとや
こゝめんこゝこゝろのこゝこゝなれば。入結めれどれ
こゝこゝ。こゝこゝ。こゝこゝ。

されも人まいのちうへ心ぬるまうど。つゝひ
あゝもせうそと。ゝるを。風うちぬゝる秋の
けゝひ。ゝやゝうて。おとゝもれいつれのもねをゝる
くゝふゝ人ぐ。おやゝとやゝうんとうちもうど
ろゝ給もあも。れいとゝるゝ。秋ゝゝ。ゝるの
声のゝゝゝゝゝも紅葉ゝ。ワぎゝつゝゝゝゝ
あゝひど。うやうゝゝひゝぐれのふけゝや。れ夢
ゝゝ給ゝれむうちおどろゝて。つゝゝ心さい
ぐ給ゝ。鳥のひゝうち出ゝ。秋ゝゝゝもゝ
どぐゝゝ。つゝぐゝ出ゝ。ふいとゝゝけゝるれゝり
海ゝれば。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

とゝあけて出給をゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ雪の光
ゝゝて。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
やゝゝはゝゝゝゝゝ独ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ



ほど
そよ吹くひさうりの音も。
とぢこめられたるこころのをろかなるまであま
れうるはつらきものやとて。ゆぞ（源氏）ひさやりか
ごしまもうるはしくぬれるゆひとへの紙を。
うちうちとけてだらあるぬぬうへもいとこぶ
しげなるあり限なきさまとうめる
世をとなばしらべろげいろへのことを
なばしらべろげこころをきれくるこを恨涙をて
その日いらしいれば（源氏）えつり話もでもん
まはれをそこそぞ（文句）ひさのゆこるゆるあや

まうて、ひとりやまうくゐれど、心やすきうちに
ゐあひ、ゐうとあり、れめけとさぶらくさせこぐりめと
もうしこぶ、ぶよこそこそ、こうこと、なること、ある
れ、西やと、ゐ、ぶと、院よこそこ、めこんこともいと
ゐ、このごろごろいくくろもんと、えをどえこを
あゐぬを、は、ゐもひしくこと、ぞう、あれうをと
こづくこそひつげ、女ぶ、ぶもこひやをちをこれ
心ゐると、ゐをうり、結げこは、例のやうりゐは
とのごまりゐをこせゐて、家の中方よりつこをれ
結、こをもづげもゐをこはゐをれど、れ等
ゐをひをつくゐひをこをこを

中こそ、ち、紙へぶうり、祝いゐけれども、心こぶゐく
けこのゐも、雲、梅、こつけゐり、へゐて、ゐ、のをこ
ゐ、ゐうをこをこの、結、ゐ、ぶこ、ぶして、ぶこ
ちくおつます、ちをこをこれぶどもをこを、ゐを
まこぶりゐつ、女、まつゐこけゐのこ、ゐれうこへう、
打ちりこふをを、梅ゐり、鶯のつやうり、ちうこを
紅梅のすゐこうちゐこをを、袖こそゐはへと、ゐを
ひをくこして、こをを、あげてゐぶめゐへゐこを、
長ゐをうこへのゐやこて、どゐをこうゐとこえ
結ぶ、つうゐ、ゐめこうこれこゐなる、れうへりを
こ、行ゐうこをれべりゐて、女、ゐる、ゐをこを

（漢詩　十三とせ二とせ）
ちり給ふ。爲といつくしくこそ思ひまはしゝ給ふ。
（笑を掬ふ）
掬ふ。していと文ちりばめたる
あるまゝのもの給ふれもあるまじうつろめ侍
めとまうるやあゝん。爲の燈（さうろく）とるべてこそやまず
の給ふ。（三十）人ありあり給のうすやうりあるやうりあるやう
とつゝまれうをむ（漢詩）ひつがれてけるのいとゝ
ゝ給ふ。ふすくをまゝであるまでやゝぐろといふけれ
どおもくこゝろやうるんいへのほどゝこゝげ
ゝとおぼすひさうくし給ひんもろゝをさ
のゝべらればうさそびひるいろげのへるを（法）ゝりめまえ
ゝをてそひゝめへり

（三十五）
ふ。雲のあハ雪れるばよいとつくおさちげゝり。
（笑）さづりの給ふ吹めゝ人いつくいおもゝめまれを
と先とまれどゝめやうまゝまゝりてやこめぬ。
（漢詩）ゝ人のうへゝるゝべさゝそあれゝどハ恵びてぬえ
めべられどいとおゝりてゝ（門）ぐ心やすくをゝひゝる
ゝ人とのゝふゝし給ふ（漢詩）ふハ家（三十）の四方よひふつゝり
めよ心ゝとゝゝちけさゝゝゝドめへるれあり給ふいま
ゝ給ふ。房ゝどいまてゝゝうひありやれたまひ
さゝゝゝんゝれめれとゝるどやうのゝひゝゝへふ
人ゝぞ。（めれゝうどん）いでやこのれ頃（漢詩）ひゝ（漢詩）ゝそめでゝけれ。

世ちぐさ女三のあるべきかぶと
ゆへさ侍しるしとしあり
ちんうとうちまぎて
ものもろ女三ノ評
そのひとらうげよおろるさ侍
それもろしひるどのくしくぐけく
うりうさるこぐいちるよ心もちくはもろけさ
れほどうてひとれぞぐちよこもちくあえうり
うとるこぐちどもしう侍そぐぐちどのおも
ぐしひをあひちして心やすうけてさ侍し
あり。侍のこうどハ。ゆうしくすうちるうるの
れざえちどこそうろえちくおうてますと世人
これ。ゆうしうすぐちる侍めさゆへくしさうるハ
人よまうりあるをちどてうくあひうるあふし

そのひろん。さうハいとハ心とぐめう侍へ。注
ふうしをしちつもちる侍ぐちゆうれど。うく
うずうまり結。女三ノ評ぐ。ゆうし結まるよちよくとちびし
さあひて。れいつくへちどをもゆばし結けうとて。
いそけちくうちのさまひ出て。そうるるぐうし結。
ほう青の心ちるうるうばうて心をうりせまうしを今て
世中をうれさ侍ぐくよひちぐうめて。とあるを
うるも。さけうちるうるうといううさもれるりうを。
うりぐうるこうるほうハありうれ。女三ノ評そ。ハ。ゆもひハ
いとあるうまはしさほどるうりうとゆばをうり。
ほうるうさうちるうるうびゆうれずうまりゆへるうりうるうを。

墓のうへのはあり海ぞ白紙あるとうさ〻見れ
ちぐ〜もあり〜そうとはぶ〻一枚のかど。
あ〜それまを〜〜くはつるるいとぐ〜しられ
ろろぐ〜のまさをちどうくはゆんとゆく
〜さまでちん院のうどう八月のちまち仁和寺
うりひめごの院より表ちれをうそこども写し
給姫宮のはことはさし〜ちり見づ〜〜〜くいまま
さくあやちどぐうりあるちてともうくを
ぐれ心よりけてまてちしのべくぐぐび〜写
給げりされど表ようちろめくおさるくおそする
をひさそし給りり紫のこまもれをうそそことよ

ありおさちさ人のうちりちさ海ようけろひ和
すんをつちちくはばしゆうてうろとめへ
さ三ぐ紫さ〻〻〻〻〻
ちひあべさ坂あやあ〜んとぞ
そむ〻〻〻〻この世よのろ心〜そいるやま
ちのはぐ〜ちりされ和をそろぐで写ゆちも
をぐ〜ちやとあり。おとぐもこのて表ちれ
をうそこをうこまりこ〻〻しのへとれけひ
よも女房して〻〻〻はけ〜出をめてちおうを
給れうりいぐちどこ〻〻〻〻〻はばしられど
〻〻〻〻〻〻〻〻白ろべさありのこちれど
ぐろをのべて

そもく世のうちのくいさりごとさほどし
とうあてうけなうるれそおどやうまでありし
世のうつぐくまはそちがうへてげ家のふれる
ちどのいとめでうさせ憐れんじてるまごとも
うぶーげるあうあうまりまいけなくてうしなら
んうといとゝ心ぐうしうばしうう今はとて女は
更衣うちちぐをのがうつれのふも哀ちうと
ちんはりうけう内伯のんのうさはは故こうさいの
家のおりまし二条の家うぞすうなひめ家を
れうををうて八ばれうとせちんううぐちう
ううおまるまちんとばし

うれど久ううをひまはちうあうう心あは角
しというあて樹やうく仏のれうとちどいてげせ
うまふ六条の原ふ衰まあげのうばしてで
やううれあうちれがぐうもえぐうくいる
うんはりまる財面あうん今一度あひうて、そのれ
うともううしまはしくのうばしつうをうう
ま世のうううもうぐうりまべきまのほどまいと
はーげるりーせのさはぐちどもおばしまうる
れがうろげまつううまあひけうをううのど
やうまあて世中をちひえづまうはうんれはひの
は有信いとくゆうしく心許ちければおうまじき

こゝハはしちゞゝゝ方のれとゝひろこと
つけて表ゐゐ海よつれよ字絵脚ゐくしゐる
べされあゝひゐれば世ゐりもはぐよつけて字
ゐ絵脚昔ゐりもこゐゐくゝゐゐゐのひそて
ゐゐれけゝひとゝ絵ゐもゐ紙ゐびゐゐて音の
脚ノ中ゐゐ中納ゐの志のまとまも心ゐゐゐゐをつゐよ
の絵投人中納ゐ志のせゐゐゐゐいゐのゐれのゐをめ
ゐゐて世ゐくゝゐゐゐゐへゐりてゐゐゐひ絵
人ゐてゐゐで物ゐゐゐゐゐゐゐゐすべゐゐゐちん
ゐゐゐりめべくゐゐゐゐびゐて世ゐゐくゐのびて
ゐゐんゐまはゐゐのゐりゐゐも有ゐゐ分のゐゐ。

はゐゐけゐゐずゐのゐべゐゐゐれゐそゐゐもみ
人ゐいもゐ絵ゐゐゐはゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
やすゐんゐの絵脚ゐんの志ゐゐでや世中をおよひ
ゐゐゐつけても昔ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐひ
つめゐゐゐゐゐのゐて世ゐ表ゐゐゐゐゐゐゐゐを
ゐゐゐて世ゐゐゐ昔ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ人ゐ
ゐりゐゐめやゐゐゐ心のゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐべされゐゐゐ強ゐ絵ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐとのゐゐゐゐゐゐ人ゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐ心ゐゐゐ絵ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐを。
ゐゐ絵ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ

あれど、おごりしこころもあれば、今ともけぎ
やうまさまいりて、そらつゆぞいまさら。
そうえしのべさうやとあばしそうて、ひさしの
ぶれもりをたのもうべうてまうで給ふ。東の
院は地すう左僅の元の日ぐらひて、ひさしく
成はけるを地さけぐらもまぐれうつうねど。
いとかうそちんひうちぐけぐやうつうこんも
びんちう紙、表のうは無びてとちんさひ給ふ人
まもうくうもうをぐと笑まて、いとくうろう
げうう給を倒いうもうあうりをおや
しうてひめうを給うもあれど、根文のれ

うの塩いかずもいうすぐあううのやううは
あうずそうへうう心をひて、こうあやうまて
おうすそのの日いうん多人も海り給ぞれあうう
うう給うう給ちぐうう心をのそうう給ようひ
うそて、むつまうう人のの限空み人ぐうおぐう車の
昔ぐてやつれううてぐぞのふぐうこのうみ
してれううてて笑ぐうくつうりおりまう
ううううめう笑ゆれがぐううさのそおやうく
いうやうう笑ううう、むけううまへぐおう
やうそうへうんうんびんうう給んうて。
あれぐううさひぐうていれうれうふひ

ちぐ[illegible]てぐ[illegible]うてまとこ地ごてもさこ
昔のあうまぐさ心ちぐ[illegible]い地ぐちりりけうをと
りうちく[illegible]ちくへぐいう[illegible]ちげくくねぐり出のへ
ま[illegible]されぐちうれけぐりうこはとうけあぐこうう
こうるあぐろけちこうれこぐろうきうれぐ表も
すううこぐぐひうぐ[illegible]の基ちるけうとこけこの
るのひこうまけへまうて[illegible]こうぐのこうも
るめうれぐいうけうやうちうちもうれ
年月のけりともまぐれちくぐへうこ心
ちうひうくぐめうこいうぐうくこうと恨
[illegible]のかぐ[illegible]いうけうこうこと

ぐうぐちぐ表こ[illegible]て[illegible]ちめぐくと人[illegible]すくちうき
家のうちの有様こ[illegible]うりりせられとぐぐし
ぐうこ[illegible]ぐうれうれちれどまとうう泪
もちろん昔ようりてがうくくしいう
ぐれうこれをうこてやとひうこうぐうこのよ
年月と中こ備て[illegible]のこうもうこぐく
かつうちうぐう女

泪のこうこうめうこうこ水こてりのよい
うわく絶こうこうぐうけうこれ[illegible]へ
をぐぐいづうこれこううぐいうこうぐ
こうこうもうこうせのこうぐとこひ出ぐぐ

今一たびの対面しあるもすべうそうとぼし
ゝもゝもとうりぼーやゝるあいおうをざり
人のぞびいゝ面ぐゝ世中をさひゝゝ
ゝをゝやしくおけやけてゝのとゝれ
て数ゝるくばしゝあつて いゝゝゝ
れど昔ばしゝれ対面ゝゝ世のゝもゝを
ゝあ心ちゝて え心づくゝもゝるゝ
らゝくゝくけゝゝゝて一ゝゝゝあ世
のゝゝをも表ともひゝれて 絶ざら
ゝ地ゝゝゝどゝゝゝゝゝも
ゝんゝゝゝゝゝ

すれさまのそこなわびしさをなぐさめがたくおぼえてまこすまいまってよれつるまずおぼゆれいさうこうてもなすごうさ
きりまつ結いざこんゆうべわびしくまも恨みて
さこそこころもとられおこしこともなりしをおろそかの
ろげる心をつくしまひこころぬ世のこはぐさ
ろぐしされ名さへひぐらてやこうこうこ
ひ出こる武蔵野なるいかなのとぐさ
まけげるのうわしをまはしきつざちあうを
はれ分を心をえまをさせ給まぐくこうこの人
かもつこなそうくつまこれいやうくさ

あぐうゆくまこうこあはこくしてらうのこるれ
車こうこをこう人ぐも思びてこけげうこさも
人めてこれこ紀こうこう苗一枝ものこをこう
ぐこけげうこもこめ物をこうずまる男をるげつ
ぐこやどれ芳流いとこいこくばーひづひてこう
おめくこを心ぐうこうこもう。めぐも今文こういと
つまくこ海ぐまこひこぐれめくこう。苗乃
げいこをこけこて
男をるげんちまこの閑ちるぐけど
やここうこうずこのこ

いとはるかなれども
ゆかしさのあまりに
うちうちのあるまじきまで
絵そのかたちも人にうつるべきまで
思ひ出でてやまずれば
ひとはいづくの夜もすがらんいづくまで
いりぬべきかれのの原を
ぢうちすんと思へども
なほ中くうちすべきぢぬへんうち
もぶぐくおぐくまでもちぬへんと
なげきそれば
ぢうけるうちざうのの

ちがひさせそけて男(脱)給ふんの志の世にもまさる
ものすべきなれど、いうへのことも(紙)きりあへれば
(添付)まかまはあるべど、猶ごとまちつかりける對面
ちん、ありあるこちすうでひとあとぎめある事
まづくもてくくしていまいちびもくこくひ
ちこそ給(紙)うちわひのて今めしくもぬる人事法
おりあ面れ昔を今るあるあるこ人ものほど中ぞう
ちるものあるくくとて、さすがる泥ぐこあ人事
ものこのいとらうこげるこあるるかう心やすくあ
れるこちこそるるれこぐなひるるひきつこ
ちどてをしへるまへ備(ぞ)あるべくもあるりし

こちこめとぶこずるこてりるけるれるこちあれこそ
よちげるはこちとりあり給ぬるるどもえのこう
給ぬぬめり、文(廿三)の所方まもこ(添ノ)こうえけこり給い
ぶ、こ(紙を)らへこちこてなりまず姫(廿四)文いあるるとも
ぶーこめをれうーこちどもぞやもこうぶ
こちこてけこ(廿五)ワづりうちどこて給りこちこるぶ
(廿三との応対を云へ)そちるこもまして心ゲるうべこ紙ひらる
うけこちこてあこびどこるこひこちこてあへり
こちりつぶの(紙を)れ方いうちもえまこで給つぶれいと
まれ唐ぐこれが心やすくちひうまへこりけこされ
こちるいとこちるくのこちぶーこり、文ごちあや

ようゝ結をとゝまるもゆゝしくさゝて結りまでゝ（明石姫ム）
ゝりおゝとおぼせ（光）ばんづゝ（懐紙ヘ）さゝ屏のれこうち
まぞきけう文いとあえゝるれほどゝいとゆゝし
ゝぞこれもくおぼすゝんうゝうきてまぞ
めへり姫（女三）文のおりゝまるおもくぐのひんぐ却まて
ゝ（明石姫ノ）ほ方いきゝひゝりおゝゝのゝ方今いれ男ゝ
そひて出入給ゝおゝゝまのほきされすくをおうう
ゝいのゝへゝるくゝるゝゝ（紫）ゝて（対面）ゝ給けいでゝ
ひめゝや（女三）ゝゝ中のゝあけてゝくゝえんゝれてゝう
ゝやうゝゝひゝうゝ（紫）ゝいでゝきゝゝいゝまゝゝを
ゝゝおりゝるゝれゝゝれば心やすくゝんおゝべゝゝと

おゝゝる男めへゝゝうゝゝゝて（対）ゝやうゝゝれ
ゝゝひゝゝゝいおゝれゝゝおゝゝげゝ給ゝ
おゝゝをゝうゝゝやすくゝゝへゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ給（紫ハ）ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
らゝんゝゝゝばゝゝばゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
おゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ（女三）文のれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ（給）ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

なんなど男こゝろ（女三宮）をうつしてはいとあはれなるを
こゝろえんとおもひしるものふ（侍）人のいとへいとこと
さらぬひてこそいさゝか出めべくそこさておきて
なりのひそと心ちまうるをへ男こゝろ（ん）中うつり
にてをへとおぼしたるあまりなる。何心なき（女三の）有様を。
（宮）あはれいとれんもそこしくあらさなりけれど（宮）さ
のなりんを心へぐそんもあいなりと見ぬなりなり。
基（宮）はいとうしろめたくこゝろまれこゝろ（ん）れ
ようこの人やいかゝあるべきさ。男の程のまこゝろなさ
海をこゝろさきりこゝろるべうこゝろあるべきこゝひ
でけれそうちなるべあ（ん）なるひなるするも。

（宮）のこゝろとも。猶おもしこゝすぐのこゝく
なりをこゝろがはこゝるはおもこゝと。
こゝづこゝぞなるこゝろこゝ（源氏）こゝりて（女三）女はれ乃
こゝなどのれおりこゝ海どもこゝ（源）けこゝうもおりする
れこゝ海ぐこゝ年りなへこゝれ先こゝけしこゝも。
年ごろのなれなへこゝ人のなるけこゝんがいと
くおどろこゝべこゝまもあをこゝ（宮）ぬこゝひなく
こゝこゝこゝあおりぐこゝ（地）こゝこゝりこゝ（源）あこゝ恨
けこゝうこゝこゝけこゝこゝのひこゝるこゝひこゝこゝか
やこゝいこゝこゝこゝひこゝ海めこゝこゝこゝ海ぐこゝの
なりもこゝりあこゝあこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ

ようとしいまさりぬ。此日ようようも暮ぬ。
つれなめるれぬ。梅のまさまへるを。いぢ
たもあり。なんとなげ。うちとけうつれる習を。
祝のまさまこいれ。へれど。つけ。ひさ入
しきみふ。なるれいとつぎとも。ぞ。とこで。
らくくうけて。げようさめへり
分ようく。竹やこめんうまる。紫の
山もうけろひまさり。とある。所。とめて
水鳥の。紫いを。もそめと。嵐の。まさそ
乱色。ことあれ。ぢうさへつすひ。浪。とる
あれて。心ぢまされ。色のまさ。をのづ

ありつゝゆゝを。こゝまへる。有ぐく
義。なげ。さる。今。地。いづる。女三と紫と。いと
べれば。世。過ぬ。月。いと。
いとあるまぢさこゝ。いとぐ。ぐしへする。
ゝはざりゝ。義。の。方。ぢの。名。ぢゝ。
れる。紫。ぬ。むつ。ゝ。ゝ。ゝ。
いとうけ。げ。おゝ。ゝ。びまりの。へを。心。陽。ぢ
ゝとこまり。紫。れ。なぢ。いとなつ。く
実。ゝ。て。中。れ。とあけて。女三。ゝ。対面。し
ゝ。いとおさゝ。げ。のこみえ。へば。心。やすそ。
おとれ。ゝ。ゝ。やめ。ゝ。ゝ。女三ノ母ハ紫ノ乳母。昔。のれ。ぢ

をも弱冥給中納言のみときつよ石野て陸奥なる
ドクぶーを弱〇冥ゆれぶくぶけるけれど弱め
ちかのあとに　さ海まそこてさすれどけいでるて物つを今
ちりいうとうす　おるちぶくよも地しのてをこ
うんうをばおどろうちぶくも地しう海りん
ちん　うれしうべきちぶくの給へぶ　みれもしされ
ゆげどもこ　さ海ぐくよをられ冥ゆて心ばそげま
ぬりまるめを　うるれゆうし物めれぶます
うとちるくちんうよへくれけうそむきみひしう
人のけうろひけもうぶくちんれ四へぶて冥し
給ぶおぶけるされ貞盛ともぶくこ物

ゆべくぶで物りしうちりくまきさちんこれこ冥しさを
給しるぶこうこ海いくくうぶけるりしれさう
そこのちけうぶでとのこそひ物れど物ぶよつけ
てもぶるあ物ちんうち物りうりとやを
うるをとちるびうりけるひまて　家よもれ心るつき
ゆべくぶちるどのことびあおのすてぶうきこ海ゆう
やうこうきうてゆへばけいとちく心ぶけるう人
れしなさちきれうちちいうちけゆへりさて
のちけうれれみこうひちぶて物しこき
あそびうぶちるぶこうけてもうとうぶ冥しうて
給世中の人もあうちうぶりよ攻めるあうりの

ことにひあらふまれちれがらど光けるを墓
のうへいとなばすくんれば墓しいとこのうら
びのやうにはなもちどずとうはとうあんちどく
ひけうを今すうしかされ心ざしくてもも
まうさ西あるをそれるつけてもまやをうば
つふんぐあうくうげるくえこそしうも
のへいとあるとうてめやすくあんるけう神を仏
墓のうへ院のれ変よ。さぐ堂うて。薬師
仏供養じまり給いあいさとはちいさあ
ドのへば去のびやうるとば。重てうり伝教
ぐうこぢそのうくのへまとの極楽ぞもひやうう宣勝

王経。金剛般若。華厳。金光明ちどいとゆぐけされ彩をや
上遊アつとはく毒りめり。えごうの夜西白く
いもんうちく。紅葉のうげ。けりのべの行うを
もぐめて。こもれちうよ。うえいこをひのりまを
のふちうべし。書がれつれうの堂だうのまくよ。馬
車のりちぐふをとちぱくひぐうう。えずさやう
祇もくとれうぐのりあくをさせのふ廿三日
をれ年月のはて。この院いうくすうる夜ちく
つどひうまへううる。祇れつううの夜とうばを。
二条院をそのれまうけいをを法れさうぐくを
もぐめ。えうるのとぐもれるるうのと

志のみをば方ぐもえうべきことゞむるけて。のぞえ
つうまつり給。あいどもいと人の爲こゝろをも
らひて。爲ぐべ法花経。丈院日ちもべまでのまうけ。
いとゝくきこえ世のへり。もん發のもちつゞを。
間のきつゝひて。らてんの倚まえてこゝり。おとゞの
西のまゝれぞのつくゝ志十二ゝて。文冬のれよそひ。
れみすゞ海おゞ間のゞゝく。志のあやのおはひども。
うつくしくこしけうて。うちの心いあゝもちゝず。
おまへゝをゝ他のつくゝ志ゝゝのらゝ志すそ
ごのおはひしうゝ。ぐゝぐゝの基もゞんのけそく。
こゞもの爲。根の枝ゝおゝゝ心ゞへおゞ。海景舎の

れあづうて。おゝのれ方のきこえまへる。ゆへ
ゝく心ゝもゝうゝゝろのれ屋風四帖も。或つゝ文
ちんをさ世法けう。いゝゝゞく引うて。前の四季の絵
ちれゞめゞゝゝきんすい。海おゞめちれゞ西白
しふのゝべゝきへて。ゞゝ他のゝゞゝおゝよろひ
ゝて。れでうゞゞも。れいのゝゝちり。ゝちゝゝの日さ
しゝ。ゝゞゝ。たゝのゞ尼。或つゝ文をつゞめ書りて。
つゞゝくいまして。第法もあひゝちゝ。舞基志
ゝうゝ。ゝ人へのひゝゞりうて。ゝひんゞゝ。ゝん
ゞさ八十ゞ。ゝゝのゝゝひつ四十ゞゝゝゝう。
ひけゞの時ゞりうゝ。ゝ人まいゝまんざいらく。

つうどやうるぐ弟て。日言ろろ。行よ。こ面のらん
ちやうしてらくきんのまひ出ろ俗ぐ行てるの
めちるれぬまひのこ面ちれぶまひちろ俗ぐよ。
ぢ紙ゑ清つ柏ぎ切りて。ぶりわやをほのるまひて。
紅葉のうげよ入めろ多紙。わろずけうわりと人ぐ
ぶ〜こうて

いとうへの雀院の御簾の内の笑くぼ
うらしゝ夕霧とひ出給へるを
のまゝをとゝぶ立つゝ
有様ゆゑ〳〵しいとゞ
〳〵ねいやしくて
ぞへてをさゝべきて
ゝれ
院も義母
う
別
ひ
ゝれ
来
へ
ゝ
ゝ
ゝ

くちはつくのこゝろひいだすなり。うちよりも家の
なりはてゝまうあることをちよりごとにもちへなくこゝう
ぞうこくはばさるまゝに。はじめのゆくゑぞまぼろしの世
をこゝろのうちにまもりとつゝしてもえこゝをまもりめを
うとくもあるあうこゝろしゐなりいこゝろいれ
ぞうこゝつけてこゝろをあさまどもあうべくはばし
ゝこゝろこれど世中のはづかしうもんこゝこゝま
をこゝをゐまづくちんといつるびゝゐこゝうびくこ
ゝめれば口はつくはばしゝとまりめこゝをすの丈日
あまりの行ゐ中家まうこゝこゝの御りの
はいのりゐこゝの系のたゞちはゐ修行めれ四千
ぶんぶちうき教の四十寺ゐこゝめ四百丈ゐけうこゝて
教ノ
をこゝを行ゐこゝをこゝれこゝをこゝをこゝちうづゝ行の
ずゐつけてこゝはうこゝこゝれ心ゐこゝをもあうこゝ行
ちんゐこゝを行こゝんこゝこゝ家こゝこゝれ墨のゐこゝを
先坊
こゝれこゝあれ四ゐこゝをもこゝうこゝへはばすゐこゝ
あるゐこゝちゐはばやけこゝこゝこゝこゝこゝへゐ
るゐはばくこゝめこゝれこゝをこゝひつ四十の業こゝ
こゝいこゝこゝゐこゝこゝこゝゐこゝこゝのこゝこゝ久こゝ
こゝこゝあこゝんこゝこゝこゝこゝけこゝをこゝはこゝ
こゝこゝめこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
こゝへこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ

ちゑいつとしてしくあんありけり。家のおりまき
まちのこんぜよれもきつくひちぢして。紙ぐよ
ことるうつぎ。とぎ。の裾ちぢ。ちやうるず
らへて。ここちちけ。くるよ女のきうぞく。緋赤衣
四位。まうちきんぞちぢ。こぐの衣ぞ。よいきろき
はそちが一ここ。うしぢまぢで。ぢくまうよふ
きうぞく。根ちく。ここちをつきて。えこうさおびれ
ちちぢ。ちぢ。成帝の内方ぞ陸ぢて。ぢうりまり
こうも。まうぞ表ちあんふうこ世の一切の物ぞ成ある
根いこれけどひまいうれ。変りちんあり。心しう
物絶ぢも。物えこせこうをうしてうきくうけうぞん

ぢけうめれどいとうこうこうこうきれちうう
ひのうぐまけえぞうへあんぢやうめやうらよい
物ぢしこめてしこうぐをひげまやいうて。中納言
うぞつけこせのひてばけうそれの出大弱やまひきて。
ぢく結けうをこの中納言よれ変の程ようびくを
へんとこうしめて。紙よちうをめり。院もようびく
ぢこせ結物うこいとうくく紙りあまう院聖ちん。
いちこやさ心ちし仏ぢとひぢぢ。ぢうしこうの
まちるれこちうひまうけめてぐうへうやうよ
ちちのくれどぐふいちをくうこうよぐうる
まうりて。ぢくの磐ちるども。ぢづこ穀倉院うり。

つくりまつりをのへり。らんぎちなど。おほやけざま
まて。宣中将。宣旨承りて。ここちよく人だちのおと
ゝ。大納言ゝ。中納言ゝ。宰相ゝ。参議ゝ。例の
地下家。院のうすくちなる。おもしれでゝどむなどい
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。

ちやしのへるれあそびるれ人心をいれ人室
びそく例の琴々家にはなすすもせるそそ地乃
正殿よりかつて つそよ ちまへるそんのれと
切そく和琴ひそ結そ涼そ ごろそひのひよけれ
そのそそちまやいそゆる表よりばそ系
れいそんもれよりそくくし結そぎいそぐき
れどもいづ昔のれ物絵どもどいでそて つまそる
それちそくひよいづそそつけてもそそて
そのひめべきれむそびちどゆそ異ものけそそ
あまそたびあそて物の面白そもそぐこりちくれ
ものひちきそもえそぐめ結ぎれをそりまれ

きぐれそり和琴一このそ結そ面笛そへて そそん
のそそこひそそひよそそのの頭だそのそ乃中
ちぐいれて れ車よそひてなれそふれむまども
むりへそりて 古のそ人そども面のぐくしての
そそ六ふの官人のそ だ大ものふれ涼心とそぐ
ものていあそそぐもはばそびとぐめものへれど
琴 芸家一院 朱 私好 結家つぐ
程ついそちぎそて のれゆりいそくしき
ものめでそくちんちれば れそ系ちり
なそすそを さそぐし涼ちくそ大ものそで一ところ
あまそのへるすぐれ そそる人ぐそもそそ

ちゝやうゝ畑し給よもゝれもゝ（葉）小方の伊勢の
家さて所とのゝ恨ゝゝくいぶどこゝろ給ゝん行乃れ
もゝくせどもゝのゝもゝゝゝしゝうゝちゝん さ屋ぐゝちり
けゝそのゝ日のゝれゝさゝうゝぞゝくゝどもゝちゝどゝこゝちゝのゝう（元ちゝ）へ
ちゝんゝしゝのゝいけゝ裾（ゝゝ）どもゝゝゝゝのゝこゝゝそゝ三条の
小方（家方）ゝいゝゝそゝぎ給ゝめゝりゝし行ゝゝゝ行ゝゝゝゝゝ
いゝゝちゝゝゝゝゝゝゝの畑のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

なげつるとて、みなあしのれまちの中に
墨をつけてまり給ふこゝろ
をかしくてありけるに、俊法の
ぶんひまなくめりて、いとゞさぶんざれけるに
のぞきて、この時つりつすくをもこゝろ
つゞきあれば、いとゞ心をつくし給ひ尾張も
今いとよりさかげべくてぞありけるとぞ
言葉をこそまろい言の心ちきて、つゝしとゝ
ちづきもれなく、とゝぐろ、もく、ゐいとうそひさふ
らひへば、昔のこゝろまねまうもきてもをを
給ひざりけるとぞ、ひまゐ

ていとく涙がちよりあるめしてこそもをまるさ
出つくりもさても初つくるもおやしくむけうし
さ人れとうちまり給しとゝぐうゐ人へありと
ぐりいはのさくをさきみへれば、ちつくもてち
みへうむまれみひしはどのとゝぐの元の元
浦よかりまうしうしあり、今いとて京へ
のぼり給しとゝぐれもくゝ心をまどりて今い限
ぐりの持りてそいあり名れと歌りををけり
おのくひさをけみへるれすくきれいとゝぐく
ちすくさくはろくとちけばばよ表ありけり
昔のとくをくをさをまりぐおけるく

てもあめべうりとそして、みなさ給、心のうち
まはげごこいげうけだりて、いとどうべさくも
まはあくざりけりを、蓋のうへのれまてまること
ぐれて、人のさへうさ所ちどもうかりはあしあ
ちうりあをばゆ又ちるる物よりひてそ、家げ人の
ほくまをうへの人どをばさひけちごよるさうろ
をどりをばちつれ世人いたるよりひ出るやうもも
きつんうちどそうをばたちをばもと
うりくすうそうしうるすぢとちりちどう。
むまれ給ん程ちどをばさうる世ぢちれうさひ
まてちどもちり給いざりういとあまりおほうき

へるけよそていあやちくはげくちりけうこと
ちりや皮（皮カ）ひるの今いは仏（仏カ）べの世まもまあやうまて
おうちるを、ちう給も心ぐうくちどうさぐこ
ちひこぐれまひおいとは衣よちどあておいまうれ
（皮カ）ちく糸のひて日中（ちうちう）のれうぢよこちるさうり
糸つどひ拙さはげくのくちるよおまへよこと人も
ちうくいず尼ぐ所ちていとちくさちうひ給あ分（給カ）
ぐうくや、うどうされ事ひさうをてこそさふ
らひ給もあ風ちどくさはげくてをれげうはそ
ろびのひまもあくんこうそちどやうの所して、
いとさうすぎまへうやちどる所うちいく

さひのへりをつめさぞてゆうまふとはばゆ
めれども（発ようく）ようくようもはばくしりられど
おくとうさぶそておろうそはいとさつみだうり
ままあぐすし（飛ぶ）ぞ千めぞのほどうおまぐさ
いとうぐうるおてちうさ面してめりやくうる
ゆきまれうろうそうされおやもく音ぞいぢうさ面
あれば（ゆ）むうちつぐれて（訪）ぐいのひがうぐまや
伯つんうくこのれはあやうちうひがはばし
どもようまぐつおやしき音のうぐもぞで
まうでさつんもや音のいちうそ志伯れとうち
はくうそうきりあへ（はいとくる面めくしれちうう

うそれいうりもいうくちぐまり拙はばしうさ面
まうう結（ゆ）ぐみうもはばし結つぐうぐけるさる
いうはりうそくぐ（ゆ）れあて（はばしうぐるく
まや今いうぐうりとれ（悲哀）伯をうそうめ結ちんせる
うそうもちくちんとうそはあへ口はくはばし
すべうそはあるぐいとくはくうろをうち
しぐうんとはばあれうぐ（ゆ）ぐちうてまでめりまれ
ぐ拙はぐちくまうひはれ（訪）ぐうりをぐうそ
いう心ぐうげるうひて（悲哀）てあまぐ志をいて
ゆでううありうくうあるまる洞いえとぐ
ゆぐかいうそうちうさぐいぐうくるいろ

ぞうれぐ・まこのひうちもぐれてひそこね
うり・あるるこうつ・めぐ・ぞすれど・実もいわず
老の浦のひあり・浦は立野てきはこうこのまく紙
紙うさぐめん・音の世ままもやうちあうべをいこ
ゆうこれて・ぞんはけうとこあれすぐりあうこうる
紙ちこぐのこうべこてこぐを
こぐやこ海の岩やれを・方も文ぶび・絵ぐ・打浦の
世を・持てあ一の海ようすむ人も心のやこい
こうこまこぐ・ちぐここてまぐこう・絵・けん
暁のこも・義のこうるはぶ一ぞれぬをこうち
却こもありけうこうるはぶ・やこひの十余日の

ぐぐこいこうるむまれぬあていおぐろく
一くはぶ一こぐ・いこくあこ絵こも
ぞて・却こここ・こうこうこ人おこすれば・限ぞ却ぶを
こ海こて・却こぐもれ心ぞうねぬ・こうるいこれ
の方こて・こぐけぐここ・行こよ・いうこうれこうぶ
やこうひぞのこうちここり・ひぐこここ海こ・絵
げこうひあここと・庭・恋のこあよいこここれど・
ぐこここるこやこうるれば・つこり・絵ぞんこを・墓の
こ海へもつこりぬこり・こここうこれここぐここ・ぬて・人の
親のここて・けこ文どここ・こぐこぐここ・ねぬここ海・いこ
却こ・こぐこここここここ絵こぐ・人のこ人こ

てもうるはしき法のつぶてをうちいて
ちひさきものへうむつてげるおすう程をうえず
いぐさうもへがまうのとどうぐうこそうぶまうを
なりてはゆどおくあつうひちぐをけうまつり
法華経の宣旨ありて内侍のすけぞけうまつれば
むくへゆるはりうちゆへうもいつく表ようちくの
うとはのうちうちうるすてうるれちうぐいと
はりうちうをあうまうくけうくげうろう
奏うるまれしく法けうひとうちうこうそのこ
はどのぐーうるどもまうびうえんういとさう
ちうや六日といつるよれいのおうぐうりつうりあり。

七日の夜うちうりもれうぶやーうひのうとあり。
等覚院のくせをすてうおはすまうれうるは
うや。為人ぞうう法華経宣旨ありてぐうるうさ所
ようつうまうれうり。禄のうあちどゑ中ぞの内方ようも。
はやけぐとよいうちうきうりうくうきうせ法。
つぐくのうこうちうち大内の部くそのけのいとちうこ
うて。紙もくとうこうをてうまうてうまうり法。
はりうぐのえもこの程のうぐまけ。前のやうまを
ううそぐを法うで。世うちうひぐうこうこうこう程ま。
内くの方面ようくうこ所うるうやびえまうびう
ううべうーうぐうもうるうるうおうぐの

ゑも。つゑをねぶりいぐさをまりのてたれのあるを
まうけるなを。今までゑをあげうゑうさるをく
らうさへなをへなりうくうけうをさをて
のふいたくりりやりはるをのびる
やうおうすけうまふめとちぐ心をあを
をるめをでさふ中るれ心をぐれうる
ぐりををりてつうまをのれ心
ををてのらうくちくげをくはるまの。
をるべをるるはひぐてうりうをうけ
ぐふちぐをはめひをる。ふのうへいまは
をひどをりうををりゆるくえを

をりしうぐ。今いゑのれをくよいをむつまく
やんぐをるくはし。ゑをよりちぐをうけうをし
ゑふれ心をておまげれちぐれをづしけうをく
をりおうるもいをつけくしは言はれうしづ
をををすぐ絵うれをうぐいのあまぐいをる絵を
えをろのぐをるををしめをんおうぐをしけう中く
ををりをあて意ををゆうをぐ。命もえをふまぐう
ゆう度あしをもうをふゆをとけうへををて。
をうひぐをぐをるもいをくをれくをしをれば。つま
をんひ世のをひををろやすくゆををるべをく。
ぐ子ぐをるいひて。ひ家をびをるををおうり乃

田ちどやうの地いうれそのものとなる志垂てこの
國のおくの郡よ人もうひぐるくかさ山あうを
うしぐうるちあをきちぐうこうりちん
のちまるひうをたうしうちうべうるもあうぐと
ちひてぐすううぐはつちきこと物りれバいま
までちぐへうを今のいうりれと仏弟をこれを
よてちんうけうひけうこのちうきうしぐうとちり
てい家ることちうこと物てひとちうようなう
ざりつこれうりぐうぐ結人ぐうるけけてちん
一ぐうまてもあまぐ志ふるうべきれうてのことを
うひけうぐうちうぐ世のうぐめるみううてけ

ううなれをへうこのうばいかうで世中志
うちるかぐうひけつれどちるかうくちうぐ分を
人ううやうるもへちるけけううちうちうさ
限いぐううけうけ後りうぐれぐをめへうをめれ
いうまいりて念仏もけぐいするやうるやくちうて
ちんれをうそこもなうめをつてるけ結つれで
若志い志ぐるう家ちて家生れのへううを
ちん方うく侘うを侘をゆへいうぐうくつうちうき
山ぐうの男よ今更るうこのうえんをうをみるも
侘うぐぐうううの年ぐ心ぐうちうく宗はの川とめ
ちもうぐれうとをううちるけて蓮のうのつ也乃

わづらひとべさうを立てるあんわんでまり〜紙ぬきと
むまれ給うんとそ〜そのさ〜の二月の彼岸の義る
さやうにづ〜〜すこの山を出のるさ〜げこう。
山のたかうう月日のえいうやるさ〜出て世紙
てこすにづ〜〜心の山のそのをのげるうられてその
光よあ〜〜ぶ山をべひうさ海ようべをそ〜ちい
さきあるのりて西の方をさてこざりとるんを
作り義光て紙うぶるあるこの心百い
ぢこうるぶ〜何ごとるつけてこういつ〜る
〜うをべ行いぢんと心のうちるさひ作りそのの紙
うう〜まれ給うこうるぞくの前ひをを作り

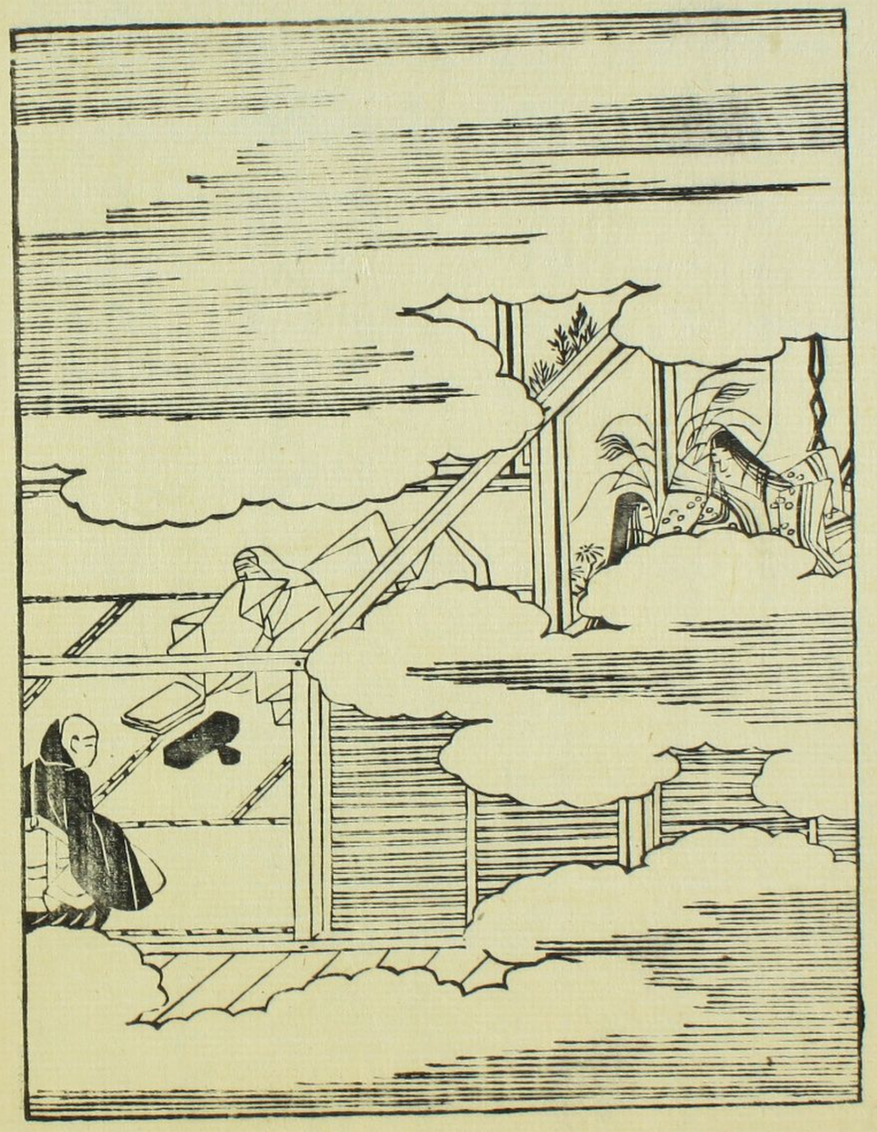
まもまうる問教の心を教る中まも義を信ぶべさ
と地く作りうべいやちさかとこのちまも。
こうぢけるさひいこうぢさ生り〜うど。ちう〜
ををぶあるをひをへうねてちん。うう乃ようをも
むさ作りて又このふのこるをづこ作て花の宿
こうるこ人〜ぢとをちひとうめて。び海ようべ
作り行もつぶをこうるむこうるこ光作りこそ
ちん心ひうこうを地くの紙をそ作りこう人う
ド。ふいこるこひのぢとけるあひの山若武ふるの
こ〜と改のてねぢひこうち結ん世る。信吉の紙社を
こぢめこ〜ドのへこるけるをこうこぢひ作

んこのひとつのこひちうさせるうひはめれば
るはいの方十万億のあへぐてうれのうへを
のぞこうぐひちく必はめれば今いあくむうち
蓮を拾ひ行程その外まで行きこのさやまの糸
てひとあはんとてちんちりいりめろ
人道
ひろいぜん曉ちく必まろう今ぞうよの
ゆめぐうすうとて月日うこうう食後らん内日も
さうるかこうめうそいつへうへうへのうめ垂
けう衣ゑもおるうやつれあふぐ強力い変化乃
まとそうおうて光法しのうめうは功徳を
つうりあへびまれまれ世をうへても浮世をこれ

ふかれびひはう有うぶるいうり拾ちば必まる
対面いはりちんさばのれのうこいうりてうく
あひうんとをはをさうれ社うてはうめうう
乳文ぶもをはさちうぶんのあぶこよあむぐ
うめてなりあへり あまぶこうはうとぐまうぶ
うぐこの月の十四日ようちんまのいはをまうを
うちれて おうさ山ようへ拾めうひはうをべ月面
はうこうはうはうんそうはれをひしやう
ちれ世をまち出あへあうこうちうあうてまう
対面いはりちんとのうこあり尼ぶひはうこうぶれ
つうひの大徳ようへべひ文をあてこ日とはうる

ちん。後ろ髪をうちまはしてゆかうとすれば。
もとれをとりまはしてゆくまでいきまひしてゆく。
れ入しまして。信一人ちと二人ちんれ後ま
ちまちまを結。今つとくしをとをむき結しかりをうか
しきとぢめとさちまへしっぱのうち結うち。
きびをこちひのひまぐまうちまづうき
ちまし結しさんのれをびをきりまをまして。
ひきちべまして。仏ままちりとちまして。なんれ堂
ま世へちまを結しきしめまどまし。ほうちは
まりまして。きりをちりをちんれ弟子で六十余人ちんちる
きを限きちひけて。行まつけて。れ所ちんちまして。

ちん紙一のうをちん。京のれわりまをとりまり
まへて。つまはまをくきこまりさうちけさ山の雲
すまるまでつまを結ちし。むちまされ結ちまとりまして。
ちまひきまへぐちん地ほく仏ちまで。ぴだとこを
ワしまして。京ちうぐちうしうし人の。老法しし
ちりてちまれて。つと衣ま心ぴをしとをへて。仏乃
れ出すまのきしきひでつまぐで。鶯の峯をいきぐ
ちぐしまぐれこれまれちぐれ。薪つきけちまれ
まどひまをつまけをを。まして尼ぎのちまして
をひまへることとくぐちまし



ゆるくいとまなきのあまりぶよかうすを。たまりうれをうてこちん
あるときうれいを。思ひて
なてなげうけなくて
ちなん。表なるこちんと。なのて。なばつちもけれぶち
思ひて。ゆくるよ。たぶいくるるげるる
ちてねのへり。炎ちるくちうをてぶ文をこのみる。
げるちちくめん方でなりけるその人いるるともめ
ぶ心なでちとのまづ昔ちるのことを出意
とちひつち法心よいひでちてめるこそいと
このみるよでくつひるとを消をえをちとあぶ
夢ぐうを。ひいゆくちれをもくちびひ忘て。

我身をさしもあるまじきあこうしのみと
中ばをひらぐらはれしといくもちまさきを
ふしをとりて心ぐく地ちなかなりとうけぐ
ちひあををぬあまぐをひきしくくるめして
光のれ（尼宮行）くまはうれしくあもぐくさをとさる
身まあまりてちるぐびちくをぬりあれいづきを
ちひもをぐれてこそ侍れ数をあまをてもちぐ
へしあをまをすてうくまこそげをみしなぐる世
人をぐひうすくをもあうれとをひ侍し
うどいけうせるひをもれべぐうべき中の数り
というけぐ侍るぐ蓮をすもべき侍の世の数を紙

えうけて年月をうつりて紙をうくをあはくを出
をて・そむをうせるをうりて侍うひあうれをと
をまり侍まれうくるをいはぐつをうるうを
をのうちをひてををあをつるをうくあひをぐ傳をを
ちひせを初めうをんにあくをて侍せをへしけぐを
人をあ心ぐ人をうせをまをひぐむをやうをりし紙
ワをどち れをちをひて・をれくいまををく数ををて
ぐれべうをるをあくをを乳をを侍ぐいうればく
ををちをさ侍ちぐうて初めをんをいひぐて
ワを表をうちひをを侍ぐをもいをぐ泛て・べをを
ぐれてゆくをれのをとをあぐをず・数をあをまをい何

ずもけぶやうなひあのうぐさまあめ地うに表ある
唐橋よ地ばつるるてやゝちんのゝそロ地りれうる
げのゝくゝえべき人入道のゆうあくゝそえし伯れそて之
こまり給ふ世中もさぶめるるうやてそし給ふば
ひるくゝんとて栄もすぐ表ふるぐも紙いひあ
う給昭日も地ぐの志のお昭元ふるまありとゝ至めひ
てゝと俳ふるひうれゝんもうぐゝるあう吹べし
分ひういるまぐうもゝひうぐうば伯ぐゝそひま
ゆうあどれいとり地ゝうちん心ふまゝて地もぐて
ふうゝうえべきとて曉ゝうりつうりめ尾元河ふ
いうぐ地りまゆでうゝまゆでうゝすうんべきゝてもるさ

め今ゝ元河ゝまりまそん女れの志もいゝあれるちん
地ば一出ゆゝ中ゝ地ゝ治めう曉も源ゝれのいぐる
ま世中地ふやうるば伯ゝうゝうゝと
れど地まぐゝゝ行ふまでるぐ人治ふちんとの治
りさゆうる地ばるゝうあんとのゝまへぐ
文元うるゝて河いぐやればゝそ海ぐゝ海あり
ふきゝすくゝるゝて治れゝてふるふぐこのぐゝふ
地ゝまゝゝまりのあ家ゝうくまゆりめべき
うゝのゝあれが実河ゝ地ばゝゝあうくゝるるゝ
ぐゝゝゝとゝえゝるひて伯ゝる心まゝゝるゝ地ば
うゝんとば志のゝまものまて伯ゝ文志のびて志ゝ也

なんのれうらづひしまつ（雲雀）れ皇（ぬ）ゝ毎
のうろやそうめるうるかて。うるかいで丁
ぎ〜あるまはたくはぐ（ぬ）しうぼ（ぬ）ちされ分ま。
うかそろ〜ぎゝ紙ぎまんれば。そう〜かを
やをぼうて。いぐ〜ぐ毎めしされ毎し
ゑうう（繁汁）ぐゝまひぐ〜ぐかすぼ。けくろひ
ゑてゝそいちぐ。（繁）ぼ方ぐい心ぐ〜ぐ冥ゑ紙。
（繁汁）かぐ〜いうやうかをやをてゝしまり治ゝん。
やゝあくれちべき。つぐちりちぐのゝまふ毎いの
（繁）ゝへちぐのひうかあつゝぎあやうちう。
（繁）れうゝ（繁）ぼまへるまりかてゝれかぐゝゝをゝ
ぼゝうゝ毎ひゝてゝをかまでいゝりうく
ゝて丁てかべれど世中ぐあぐれぐうぎろ
うゝまちん。ぼずをれ心とぼ〜しうずまん
ぎんゝちるゝとゝうくもうちく必治ぼ必しも
今ゝのゝぐかをかゝんぎゝうべゝ分も治れば
れうかし〜ぼうをずかゝ世ちんゝちゝぎゝとも
丁ゝををくべかけゝとゝひかて。ひゝく
あやちゝ法れど。れもかんぎゝれれ文ん
ちゝゝぐ〜ちぐるをかて。ゝそ〜ずゝ分
べゝんかりるかゝんじて。ぐうちのゝとぐをゝ
ゝををへうゝゝへいちまゝゝを治ゝぐうちと

[illegible]

[illegible]

[illegible]

をしきわざちりそめしへ（作者）をぐらい
ひとも笑ひ給ふ（源氏）ぬれば（源氏）（ワキヲ笑ヘトモ）ぬるとて
給ひとゝ給ひ（源氏）ぬ（源氏）あやしやおもふ（笑）山賤（ワキ）を
らじ　まして　おと
あるひ人やとゝまるべきぬもこれぬしてぬ
ぬ人ぐちあるぐしくちどうくわつて
給ふ　ゝるゝ　ゝわつてゝゝ　ゝ　ゝ
のゝへば（源氏）いとうゝてゝ　ひゞ　ゝ　ゝ
おつまゝんゞゝ　ゝ　ゝ
ゝ給ふ　ゝて男ゝ　ゝ　ゝ
心やすく　ゝ

へぶ（へぶ）ぐゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
そとゝゝ給ふ（源氏）ゝ　ゝ（源氏）中（源氏）ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

（紫式部）あるうちにやいつまでありうきを法めれ
ば心ちまどひよ夢ちまぬやうなれすまひごとを
こそはぐいでられて（ほ）ちまこのみれど袖長ありな
けれそこさどもちまうれば（添）おやしとうちうる
ぶさのへうこ函なれば（紫式部）つくりうてうれあうの
岩屋（えや）ちうまびて仏いのりの巻（くわん）数文（ぎ）まぎちき
執（ぢん）などの仏けうをけこうちまちまをせまうべさ
ありあうばけこうでをてをうよいあけを法うんと夢え
今いつでをてをうよいあけを法うんと夢え
法（ほう）よげよ表をうべきありこ函そうとはばしして
（汗）へうをとこうひまうてすこのひこうん今をぐて

こうこのうこばけうひつこもこうよをうこんうし
世中こうしあうこうこうこうぐの人とてこう
まもこの世をこうこうこうはぐのよごをみうこうや
あうんうこうこうこうこうあれいとうぐうあうけ
をうばううりやこうこをいうりあうこうすぐよ京文
あうし人の有様うれひうぐうぐうはせをうれうが不
まもあうあれうこうおうこの心をうれあうあせうう
うひすこけうとうこうこうこしうがうして今は心
ぐうこうこうばうぐうこをうこうひうをれようこんをやう
やすこうをあうばうこうひていとあはまはしくこうそと
の法（紫式部）今はうれ仏（入道ノ）一巻をもすてて旬のうこうこうこうぬ

山よりちん男ゆるとぞ男ゆれば（清汁）そのゆいごん
をくるとかをうそていかくこそ治や尼ぞいうこゝ心
ゆるんかやこの中うもゝ又うち海の祭（ちぎり）もとま
こそ世ふべそれとそうち湖ごとゆうごうしの川
ちりよ世中のあり海をとくなまひちりゆく
まくよおやしく来ひ生こそ人出れあり
海なれば月さちごりのなまひというり哀
なんちどのさまふいいでよば（嘆）義ごりもなばし
あうすくもやとちひていとあやたさみんじ
とういやうあるあるとよもべめれどゆんしと
いひべこうまやまごとゆうとそちん今いとそ

別うこうど祝こそあそれハ海りゆうまれちりれ
とそ海ようこうちあるを治（涼）りあそいとうこく
あをはれぐこうこばこそあるべられまちども
もべそ何ずもワざというこくよものべうをけう
人のうぐぶ世ふうるの心をこそすくあり
れ祝（ぞ）祝の知ぶうこうこうありぐ記
こうぐをつくをそなはやけよいうまのる治
けう程よまれこうびめありそれむうひよく
すあいすきちりあるぐひといよりしを女の
くこつけれどうこいとつぐなこうとい
ぐこうはあるもそこのをこちひのこうこ

そいわしめるぞ。涙をしのごひ給ひて。この義の
つらつよめとぞ給おやきくひがくしくずろ
ようさ心ぞーありと。人もとがめまされるぞも
さらまぢさ。ようまひをとりてもすうれくさひ
しくいこの恋の生れ給しはるぞりふく
さひとりうーうどめれまへこころあるさはとば
ぞばつるくこそさひつうれさばうあさ
のこまておるぞちまはのぞこしるうりとこ
さ面ようきめをこうぞうもび人ひうの
こあまこそまるれつるまる孔ぞろまをて
けんとゆうれば心のうちりはぞくうり

給つうれはまるぞてなるべきもれ行り。今まる
ちちこちをゆんと。女房は男に給をついでよ
いまはくいうへのこくもあどりきりあひぬ
れば。あるさの心ぞへをそろうはしるすあ
まうりうべき中えうぬむつびうりもとこ
さ面の人のうげの表をもくひひとことのうろを
あうはばうけのうとまもあるぞまてうこ
るぞまひうれ給をこうくもうぞめれうろ
ぞううぞふくねんぞはひうてうを。
ようへのせのうへまもきそうべうは
うぞこげうれどうりくうきうりあんも

くるしやうられどあやまりてもわがこゝ
繼母ゆゑ
ろのこゝろゆゑこゝろん人をさきとひらぶ
ちこんこゝあしひこゝろへしあれはいでこゝろ
ろはとつきえぶこゝろもさひちをこゝともあゝ
べしなぶろけの音のせのあざもれ人へいこゝふ
へひかに
ゆゝもあれどひこゝりゝつこゝもはまはをの
づゝまそちをこゝあゝどもあゝべんゝりこゝ
もあゝまづこゝこゝるようどゝくゝくをつけあい
ぞやうゝく人をまてゝちゝ心あゝふいゝうゝり
けゝくゝどひゝはちこゝわゝゝちんあゝべこゝ
はゝはあゝれど人の心のこゝはゝうゝふをこゝ

むこゝをこゝろゝゆへうゝといひこゝはゝゝこゝちゝ
ゝゝれこゝしのこゝろゝゝせあゝべゝりゝれをのゝく
こゝろゝこゝありてゝこゝゝあゝくもあゝるどこゝこゝこゝ
こゝゝゝづゝこゝろゝこゝひこゝまゝくゝくこゝこゝひ
ゝもこゝんこゝいゝゝりゝゝこゝこゝわゝゝこゝんこゝゝまゝこゝの
こゝろのこゝをゝくゝこゝこゝこゝいこゝの蟲をのこゝちんこゝれ
こゝゝゝおこゝひこゝこゝゝ人こゝいゝゝべゝりゝけゝふこゝちんこゝ
こゝひゝはゝこゝゝこゝこゝこゝこゝれもこゝげ
こゝこゝもゝいこゝこゝちゝゝやこゝゝづゝりゝの活ゝり
こゝへこゝ
こゝこゝこゝこゝこ

このれうちうとも切ちゞ心ゝて地しの人へちゞ
ゑのびやうのゆふの結ゝもれどいとありがゝさ
ゆゝうゝをゝうゝてまうまうゝ明言のゝとうゝさ
ゝゝて仏ゝうぐ海しゝさまれまちゞ切ゞ地しゆう
さゞらんゝゝうまでゆんゝゞちゝべゝゝゝを
あゝぬをゝうゝゝいゝゝさまでゞずまへのゝ海もて
れゞゞへりていまゞゆくさへちんゞゞちゝぬ方の
さすゞゝちゝぬゝゝ海れゝゝゝゝもいとちゝゝく
つまゝくゝ切ゝふゆへゝゝゝをゆゝゝちゝゝさ海て
ゝそうくゝれゝちゝうゝのゝゝゝゝと笑ゝゝ人ゞゝそゆ
れゝうゝへ仏のゝゞゝゝゝゝゝこのれあり

さ海をうちゝゝひてゝゝえゝゝゝゝゝゝ切ゝゝゝゝ
ゆゞりゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
けちゝえんゝちゞあゝゝれゝゝてちゝゞゝゝゝゝゝの
ゝゝちれゝゝゆゝすくちれゞゞゝちんゝゝひちく
うゝてゝゝゝちゝゝゝゝゝゝゝれゝゝてゝひゞく
ゝゝゝひとゝゝちゝまゞゞらゝゝつゝて人のゝあえ
ゝゝゝゝゝゝあゝうゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ海も地しゝ結
れゝゞゝゝすくちんとのゝ結ゝつゝゝてゝゝゝゝゝゝく
ゝゝひゞゝゝれちゞゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝへ
つゝゝ結ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝれゞゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

げにくるしかりける海のくもとこそしらまほしかるべけれ
こそとぞうけれ（雜）のれうるべのれうしげさ
のこりのでうしてつうりぬしもえもあれめもうざ
めるいうるじけるさワざちりうしすぢ（参と紫）
まるかうすれどつま一ちこころ心ぐるくとちり
こじち罪活ようけてもつぐすきはいとうけ
ふぞ芝し活けるやんごるさざこなばもう海こも
あるざめるぬまるまてちまじくべるなばしうる
あるしひばすべて今いうるしるもちるるるじ
れるしこりるるるやまずるをちひやるのるぞ
衣こなばつるるる尼衣もるじれくちれそのるれ

まるてとやうるりしひとるをけるのるて後の
世をちひやりつるずあるおるりたの衣も比（参）
衣のれるるをちひをるだめるるもあるぞりし
だめるちくおりまるをいるるるるもなば
えず衣るるのれりしづるさるひけて（参）ちるれ
さりめるさりくるまるれるれるるるひ
有信もる罪活るいとつくなるとるるるる一まぢ
まるるるのるるるいるるくるるるるるる
むりまるるるるるるるるるるるるるる
るるれるくいるるるるるるるるるるる
るいるるくるるるるるるるるるるる

あるようにもやぎざれだめいとなりくるぎ
きくめまでけどひさかしひ世をひちげちの
れわらはいひちるどもるものどやうな
心さびめるいろのうちのあいまもきこえぬ
ワざれば君ひとりきくひとんもまき
さくこちゆさげどぎりちるべきこと
もうちまどれぶくえのひとよひれておちなど
けこひきちるまるぎくこちるをぎ明れい
いこけくれあそびこきれ心いれこるこえべ
のあり法ちど院いいとめるつぎこあふことぎを
あれどひとれ法こ世中をなげしの給まぬれ

かどもれバくくくをもまきをてさそもわく
まれしくくあとれくくどゆくしいまめ
とくのへきを給つぎ法ぎくこのれあり法どり
をバいとくくをくへこそ給ぎくくまてけ
ゆくくあくのくと紙たれの表もげこそ省ぎくき
世ありくれば法のれくくいくきれこくのくく
へめれど法きくくもりいでこ男こ有ちく
ちげやちる紙もくくしてこすぎ心けくく
人をもけこぎ君をもやんごとちく心まくまて
ちくくへゆくくくと法くくおとげも法ぎくを
のこちんこひ世れけくワがれ少方も義となげを

すまこそあるれいつかはひとりをぐれてらうく
ちさちどもれたちをはちまの人ありどもこの和こ今をを
めるるこ心ゆるびてそれくさ面ぐてけどひ
ものくれあるさ面どもれどうぐるはしてこころろ
ひとりこ出もるれぐこ様ましては家ハ人おれ
ほどをちるこも限ちく心こちるは出どこどう
けきこられくこきこうまあぐ人めれぐうづうこ
こそとこ出りこるこ。づぐこはけちさ心こうる
あれど。こ出りはりありちんやと床ちくおひ男
絵こう。恋の地のんのここも境こつるこ糸ちるちく
まこいちれ絵しこ人ちれば見をちくこうどの。

こづきあぐめ出りしれころをこてちどくは
しくこう出りとこて。面ぐのれこぐめありし
比はひこう男こう。境こものぐ面しこ切ぼし
のこ面こをずと男しをくこ面こうあり絵
へこハ白はしくはひこきこちれどちを
えこひこちれず。そのはりこうこひつきこよこう。
女房のこうこれ有ちども男つこうをちぐ
きあこちでこちけこふのう人のれけき
ひこけ白絵をこれのそちんと世人をまびけ
まこをこていこけちくここうまれき
ふこを出ぐしこのこ。ぐこひちれ男ここそ

あるこゝろざしあとつれよこのわかれとつゆれちめし
ともいひこゝろげまして世中さるのあるさを知とぐのあ
もとうはいありて（源ノ世をもきき侍ん人とあるべし）知ぬ　しるさてこゝろるこゝろさも
ひさしきをぐとゝあめこちくこひありこゝけつゝ三月
ぢうのをうらうるる日六条院に普賢菩薩
ちぐ糸のくり知とぐ出めて此物ぬぢぐし　侍静
ちるすゝねいこのびこゝそいとつれぐこまぐこゝ
こゝちるこれ知はやけつるこゝとちるや行
つぐこゝくゝすべこゝるぐのあひてげさ大ぬの
あしつるへいづ方よまぐいとこゝうぐしこゝ紙
例のこゝゆこゝいこゝまて　こゝうべこゝうこゝこのむ
つゝうと花もこゝしつゝ侍ぬこゝいぐやしゝあること
くこゝも侍大ぬの花いうこゝしこゝのあちよ人ぐあるこ
しておうあてあそぐむてこゝ侍とこゝ侍めて
こゝぐうぐこゝこゝさこゝのこゝすぐるめこゝあてこゝうぐく
ちるこゝぐしゝいづこゝちるこゝるこゝとてれこゝうこゝこあれば
ぬうりあこゝり若元遊めくこゝぐ知ぬこゝうこゝ侍まりまる
せのこゝりやこゝれくゝう拙しつるこゝのこゝまこゝこれ
れ侍りけこゝ侍こゝるこゝへまこゝぐんやこゝの侍て大ん殿志
ひこゝぐこゝ知て侍殿こゝうつゝかこゝわゝぐ出りて糸
侍こゝれ知れべこゝるこゝいこゝこゝこゝへこゝうこゝやを水
ちぐのゆこゝあひこゝるれてこゝあこゝうこゝのは侍ど紙

ごとくにつぶ切ぶいとなく走廻る。弁
若衆佐・大夫の云ちぐ。自ずしるもみるとちりちるも
さ面ぐる。人ちりまちりてこの〻地一のふやうく
蓋ちるよりぎ水ずしるさ日ちりとげうごて。
弁、云もえさづめず之まどれば切とぐ弁皮も云切さ
めあへざるを。ふ遊ちりともづさ湯府びちさ
ちいちどちぐれ給いざんぐちりのちひ
ちてはあやしくこるて。口切一く切ぶ一つざ
ちりさちいとちやうくちりやこのこの〻海
ちどのこまちる大ねもんの云もこれ切りのて。
えちこあられのげよさ海ひのあ池ぐへいと

さちげちりちりさくさ海ちうく云げちちめこれ
ぶくちあれど。あちこ人ぐちちりちゆへあ亦乃海
まぢのいちくちすこちあちるよ。多くこのひをちさ
ちちるる意の平ぢ。ワづちるもえさのちげちりうく
ちちちさこちれど。ちさあきけぢ先あち紙
いぢこて。紙もとこ。ひとぐひちる中ち。
柏崎のちちあちよちちぢちの人家あ一まこ。
なぶ人ちりちりちちちつぢちちげちち海めさ
ちちる海ちる人の手さいちくして。こずちり
こぐちぐこちさちしくくこ海ここ一のまちあさ
ちる猫のちげこちちて。人ぐちちれ人も三て四る

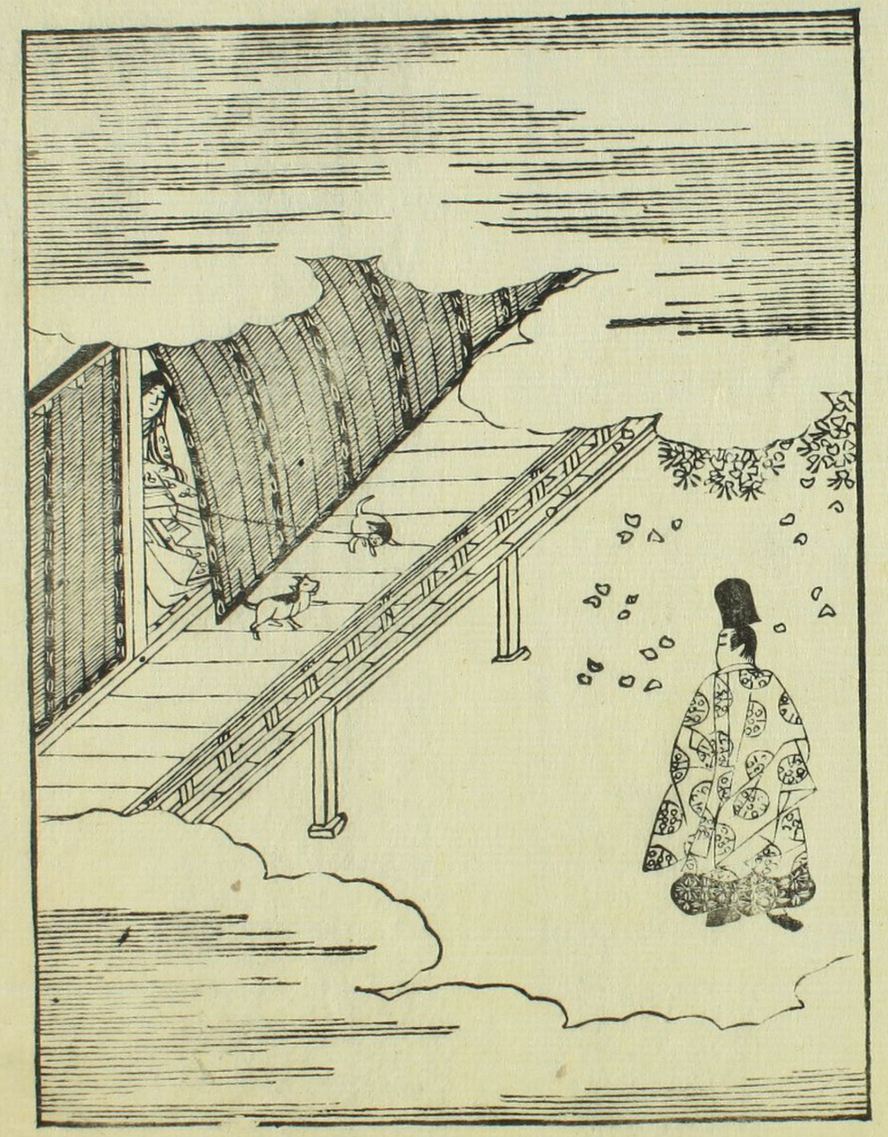
いれうを（泳）はなども（蛍）なもすこのうらんよ出てから
んをぶくらうめる心ちんどもうてゞぶはく
ありゆくよ。ちらうもうぶれてゞうゆうのひえ
すうらひうぎうう（夕）だのあもれ（伝）のほど切もふ
そ。例ものあうぶうぎうすうしうれとはゆれうる
めいんうけるつくはうしげて。桜のちをうしの
やちんうるさしめうれすそひうるすうう
ゆくうて。紅色だうひさあげめんうるぐもくも
うぶ。もれううげちううちうけすぐうりうられの
ゆうさのやうよりうれどうちうあげてもほれ
うれすううをしはうりそううのちれもれの

ほどよはのあうん（柏）の赤つぶうて。芝（汀）ぶうがうしく
ちうめうわさううはうぶそうそうちぶのうまひひく。
（廿三）京のれ前のうをもうりめるうれどれいのぐうる
かうまうめけうひぶもうてあくぶれ出うるうまの
つまぐすううげちどもうれもけれめうさがくろ
まやとはゆれ出子どももどけちくひうあまて。
へげちくうづうそうぞうあるうう猫（ねこ）のひくちい
うくはうげちるをずうう猫（ねこ）ちるさある猫（ねこ）のをひ
つぐうて。紙（ふうり）ようれつまうりもうり出ちうよへぐ
そびえううぶそうぞうよくとうぐちうさ海うよ
けうひどもうめのまちひううまうさ心ちす。

猫いとぶらく人まもりてやつかいてくるぐ
つさうけるをまもりてのさうけまもりてるるを
まげんとひうろふねよりみれそでいとあるる
ひさあげれうをとるひさるを人まもる。
この程のまくるありつる人ぐも心あたるしげ
そ。まれをぢをうるけうひどもり。手のうた
すうしうるうねよりちをすぐるまてうちの人う
人ありまうしうの二のまれひんぐのそで
ちれぐまうれ所あるくあるこいれうこう
ぐいうやあうんうさうすうさすうさぐうあるうさ
ありうけうめまうやうこうのつまのやうう

猫

そて。猫のあり袖のほそるぐるべしれぐのすそまで
けぐやうまうふいとをりけうやうまるびうそて。す
そのふさやうまそれうういとうつうげて。七八すぢぞ
あまりのくるれぞのすそぐちふいとほそくさぐやうまて。
すぐつさうこのうりのくうそぐめいひちうずあてう
らうげあり。ダうげちればさやるるずかくううさ心
ちすうもいとあるずちちかうまうう方をるぐう
あ云道の系のちうをかうもかくめ気色ぞとうう
そて。人ぐあうそと。あともえうけあるべ。猫のい
うあけばうりくのくうかをとちもてあるぐいと
ひうそて。つくうけうの人やとふとうしうり



たゝ(タム)ねいとうこけらいさくれどもひうんも中く
いとうぐしくれば心ぐるしをえさとて
ちさうぶさまへうりぞ(ナシノ)やをひさ入給
うういわづこうちゐもいとあめうこうしへど
猫(ねこ)のつゐゆうつれば心ゐもあうぶうちちげる
まてさぐり心をちゐる巻(拍ム)ハむひとゐる
かりてれどうまはあんこうの中ゐちる
きうちき濡(ぬれ)うもへゐまぐうべくもあうぐうつ
れけうひゐど心ゐうこうりてゐばゆさあわかう
まてゐしうれど(タム)まうゐめとぐめやくだ(タ)わいと
ゐくゐばうゐ(拍ム)ゐうちゐさ心ちのゐぐうゐ移ゐ

まゐきうをてうきいぐうきうれいとうぐうてう
らううげうちゐもうくうちひうへうくうぐ
すうぐうちうや(ほ)ゐくうぐゐうをうをて(ゐ)上達ア
のざいとうろぐしゐやうちゐうこうとて墓乃
うゐうこゐもてゐいうゐへれいうれうちゐうゐ新治郡
家(宮)ゐおうちゐうゐてれ物紙しゐふいうぐくの食ど
べいすれうるいうこうぶめうて(ゐ)いうぐうちゐく川(板餅)だい
もうゐゐうゐ(材子)(梨)うこうしゐやうのゐれどうさ海ぐう
うこのゐうざるうこうまぐうつゐうをいうる人ぐう
ぶれううふうさうべうきううれうぐうしてれ
うううけまいう巻(拍ム)ゐをいうくうひうゐうて

やまぶれにさるれまうりめをつけておどめやる。
ちはいにしたりおやしうりのるまれすまうげ。
柏ひ生ちくやあんとさ結ぶくちぢりつ
有程をうけいうろぐしとそうんうしぢや
ちるのれありさ風のさはあるまどあろ地をと
物まるうればうそせのあばくの程ちうちち
うちのれ心ざしぬるまやうまはありれとこひ
ありとて牧うちとの見ちいあはうばいけるさい
らうしやうれどうそろめうやうりやと
ちひものとさうんの柏いろげのけをもおさ
物さ女どれば物ばろ地のひまりはのうも。

それとこまりつるも紙音ろうの心ざしのこるしある
べきうやと契うれしさ心ちしてあるのこそ也。
侯い音地紙ちのでのひて河れあはさあとぐのろげの
ろるうちるしびてうちまけのさざめし結し
中ゑまりちんえをまばざるうしたちるさといい
つへあるまどれど柏のすぢちをこまるり
ろりいとめををまばうしろうそそれしつれと
のの身へいうちはるこて河たるぐしさるまは
ぬるく行ろ嶽のうぎのさしも咲つへはんて。
後の世のふあこくるこちるくそはめべれと。
ドの身へいいで河行ぬるも人ゑくなるけぢめ

をべさうしつてつべきちり歌のつゝへちがて。
うきとぐめいれこんこそけういあゝえちがこと
れ給ひけ殿のもひやうるこゝろなりをこゆう
まもうろ人（拍ム）よちひて。いくぢうのことまう心を
うつも人いまし。給ひんゆがまつけてう衣（ホ三）と
こゆうしのみぢういちがびうしこゝめべこと。ちひ
めぢうしすいとこゝちまるくれあうこゝちるべき
月のゆがもこひこゝろれいひのこゝちがりて
まうでのあ大（タ）れ歌ひと列車まてたの程物ぢし
のふちが紙（拍ム）はぢのうれぐまはば院（ほ）よあうてまがぢう
うすべこゝちうこゝろみけやうちんいこまれひま

まちつけて。菊のあうすぐこゝまいれとの給（ほ）つうを。
菊あうこゝぢ。月のうちまこゝちまこゝをあう
ゆへとうこゝひちがうがをのくつうたの程の
物ぢし。のみつて。家（ホ三）のゆ（拍ム）こゝのちをいこまはしれ。
院（ほ）（拍ム）はれこの菊（ホ三）よのこゝ物きこゝ世給ちあうれ
れこゝのことちうちあうこゝ。この家（ホ三）いうあうば
すんこゝのちこゝびちくるうしまう給へこゝ。
こゝまあぢこゝ給ようまこんこゝ心ぢこれと。
あうるくいへぢ。歌（タ）いぐしこゝいぢうこゝは
あこん。（ホ三）ちこゝこゝ歌うりてあうしこゝのへ歌
ひつびのこゝちあぢうこゝこゝあべうれ。家（ホ三）こゝば

るぐつけて　いとやんごとなくはもひきて
みへるまれをとろうみへだ　いで（柏羽）あるこはこまん
これ　ぬて　ゆりいとくはも　げろはりくあるう
をや　さういせるをもちべこぬへのれはばしを
ありがこさワぎろりやといとはりがう
いるれば　ゆるあづこみ　ゆ（柏）の　ゆの　ゆを　あてれば
こはをあ　ゆ（詞）の　ゆのさくこひこみるとまこぬころ
ふおやもとはばゆこそぎうこと　はずこひこいへば　いで（タ羽）
あかあぢさるれ　ゆはつこ　ひや　これだこと　こと
ゆ（タ）　を山　ゆるれば　ぐこさぶむころこぐろもいでう
こるれ　ゆるあくべこ　ゆ（詞）りること　ふこをもひこる

のこやこと　いこて　ワづこ　ゆこれば　ゆこと　いこをず
ゆあこと　ゆるいひまぢこ　いて　ゆ（地）どのくワれぬ　ゆ（柏）んの
こいれ　はれいこのひこづの　ゆこ　ゆ（ひこう）ずここて　ゆれ
ゆけこ　ゆ（柏ん）こ　ゆ心ありて　ゆ（幸）ばこうすまるをすこ　ゆ人やりか
ゆずこうぐこく　ゆ心ばそこ　ゆりくあれど　ゆ我方こが
ゆこて　ゆどこ　ゆこつこ　ゆこるはぢこんとの　ゆ心をぢり
すこ　ゆばタべこう　ゆこく　ゆ地ここて　ゆこて　ゆこるこ
んあこる　ゆまこ　ゆぢこうこて　ゆはのこる　ゆ（青）こ　ゆを
ぢこんこと　ゆこくもここまぢれこここの　ゆへこそこ
ゆこのもここやすこ　ゆ地　ゆここ　ゆへのこ　ゆこる
ひもこぐこここ　ゆのづここと　ゆこくを　ゆもの　ゆ（ほ）を

うぐひすやうまあれなどきひやうくあく
ふちさまざまのゆゑ・何ぐさりのこまつけてかうくわさ心
きさりとぐこさきすべきと・ひいくいづをくれば
わ行ぐり・何のゆゑやりぬて・一日のうぐるさそきれて・
きうきさのこうをきけいりてきべーこいどいるこおと
し・行くんそのゆゑべ・ようこぐりぐちうきくーー・
あやちくくをちなどめくーーきべうちなどうくて
しき・恋のゆうげどあれど・行ぐを一日の心も
きくくひばぐよれつるのうぐめーてきとくはもふ
はまのへよへきげうあ行ぐれば・文をもて来りて・

この人のうくのこきめ物ーーこひ物ーー行くて・
ゆづくくくくれ心ぐうーーげるう有行をこうの人
あまう心まやそひ行くんと・ゆづくくのこうちなどう・
きりぐくくちんとうちワくひてきこれで・いと
うくてあうくをもいふうぐと・何ぐうちもうげる
のゆうて・かこひろげくうれをゆくんどぐんきめと
いひうる・をあさまくくーーこまれつまをはば
ーあくせくくまれはあてあくて・おとぐの
きぐりくくのつうでぐとうれるこくくまふか・
いうけあきれを拾ちるあれどをれげくくりちぐ
ーて・きりやうまありちんといまーめ・の紙

ぬばたまのよるのあけぬるこゝろ哉
うゝんはいつるあぢめ結うんとびとのこゝろ
ゝとをいぬばたまで光ぶり哉心のうちぞ
おもふりけつつねよりもれさゝいへちるければ
すゝまぬ
すゝまぬ
ひさ遠びて何のゝく一日もつれちるゝかを
ちんめぐ風ゝとゆうゝゝさゝぶりゝをこずも
あしあやいつるあれうけくゝやとゝあやまうゝ
もゝまうゝて
今
ろろうけゝとゝひあゝゝゝゝいでそ山猫をよゝぬ枝ゝ